都市を考え、都市を創る情報誌［エフ・ユー プラス］

ISSN 1881-6541

fu+

Fukuoka Asian
Urban
Research
Center

NO. 6

都市を考え、都市を創る情報誌
エフ・ユー プラス

都市を考え、都市を創る情報誌
［エフ・ユー プラス］

URC
Fukuoka Asian
Urban Research Center

都市情報誌
エフ・ユー プラス 第6号
2008年12月24日発行

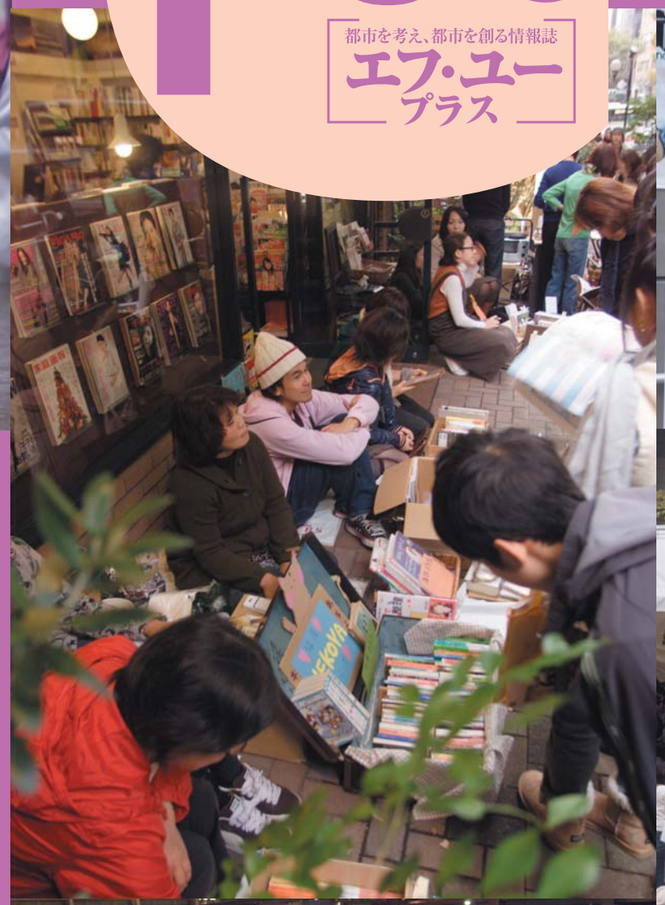
fu+

Fukuoka Asian
Urban
Research
Center

NO. 6

都市を考え、都市を創る情報誌
エフ・ユー プラス

特集
まちかどイベント
—人・文化・集客—



Fukuoka Asian
Urban
Research
Center

NO. 6

都市を考え、都市を創る情報誌

エフ・ユー プラス

CONTENTS

特集 まちかどイベント

01 人・文化・集客

02 グラビア
まちかどイベント2008

04 もっともっとステキなまちへ「天神ピクニック」
～『歩いて楽しいまち』『心地よく快適に過ごせるまち』『持続的に発展するまち』を目指して～
We Love天神協議会

06 福岡・朝の魅力向上「朝カフェ 2005-2008」
～官民協働による自立した「まちの魅力づくり」事業を目指して～
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　山下 永子

08 ふくこいアジア祭り
～福よ来い！の思いを込めて踊る～
ふくこいアジア祭り組織委員会 事務局長　酒匂 彰

09 御供所ライトアップウォーク　福岡市都市景観室
博多灯明ウォッチング　博多区役所企画課

10 MUSIC CITY TENJIN
～街中に音楽が溢れ出す。九州最大級の音楽フェスティバル～
ミュージックシティ天神実行委員会

11 BOOKUOKA(ブックオカ)～福岡を本の街に～
ブックオカ実行委員会/石風社　藤村 興晴

12 福岡市の文化・集客への取り組み
～文化の可能性・集客の新たなチャンス～
(財)福岡市文化芸術振興財団 事業課事業係長　高橋 栄幸
福岡市経済振興局集客交流部集客企画課企画係

14 まちかどイベントと都市
～都心を劇場に変える「まちかどイベント」～
大阪府立大学 特別教授・観光産業戦略研究所 所長
イベント学会 副会長/(財)福岡アジア都市研究所 企画委員　橋爪 紳也

16 まとめ
“まちかどイベント”都市の創出
(財)福岡アジア都市研究所 理事長　樗木 武

17 博多駅地区社会実験「はかたんウォーク」報告
通りににぎわいを創出し、歩行者に歩きやすい空間を
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　兼子 慎一郎

20 福岡アジア都市研究所セミナー
(財)福岡アジア都市研究所
設立20周年記念シンポジウム
～東アジアのダイナミズムと地域交流拠点都市の新たな可能性を求めて～

24 データで見る福岡市 vol.6
(財)福岡アジア都市研究所 研究員　岩屋 京子

26 アジア文化
アジアポップミュージック事情2
若者が目指すのは東京？アジア？
株式会社九州国際エフエム 取締役 営業制作部長　坂田 隆史

28 アジア太平洋都市サミット
ダイナミック大連と第8回アジア太平洋都市サミット
(財)福岡アジア都市研究所 交流推進係長
アジア太平洋サミット事務局　山本 公平

アジア太平洋都市サミット共同研究事業
「まちづくり市民交流ワークショップ・Charm Hunting Workshop 3」
“Creating New Value”
「世界でもっとも“お買物を楽しめる都市”に選ばれた福岡市からのご提案」
Proposal by The Best Retail City “FUKUOKA”
～福岡市・大連市・バンコク都による『まち歩き・魅力探索ワークショップ』報告～
(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　山下 永子

32 中国街角スケッチ　大連「海創週」
(財)福岡アジア都市研究所 主任研究員　唐 寅

33 インフォメーション／次号予告

特集
まちかどイベント
―人・文化・集客―

福岡市の中心部で新しいイベントが行われている。10月・11月に数多く、すっかり秋の風物詩となっている。公園や通りといった普段から親しみのある場所から、寺院や小学校の跡地など足を踏み入れる機会の少ない場所まで色々な所で多彩なイベントが繰り広げられる。

このような、まちかどイベントから福岡の「人」・「文化」・「集客」が見えてくる。

第一に、イベントはまさに「人」である。行政・民間・地域住民といった様々な人々が関わっている。セクター間の協働や、業界内の繋がり、地域コミュニティのあらゆる世代の交流が生まれる。その中で、人が育ち、さらに発展していく。

第二に、イベントでは幅広い「文化」が取り上げられている。博多部の伝統的な寺社から、若者のパワーが炸裂するライブ、アジアのエネルギーを発散する踊りなど。文化の広がりは懐の深さを示すものである。

第三に、アジアに最も近い都市、九州の交通拠点都市、中世からの商人・貿易都市である福岡は、九州のみならずアジアからの「集客」も目指している。集客は都市の活力でもある。

2011(平成23)年の九州新幹線全線開通・新博多駅ビル開業というまちの大転換期を迎える福岡。この福岡をさらに魅力的にするまちかどイベントに注目していただきたい。

まちかどイベント2008

福岡の秋の風物詩となっている、まちかどで行われる様々なイベント。
いつもと違うまちの様子を新鮮に感じたり、歴史を感じる空間に身を置いたり、手軽に文化に触れたり・・・。
もっと福岡が好きになる、まちかどのイベントに参加してみませんか。

■天神ピクニック

■オープンカフェ（写真提供:We Love天神協議会事務局）

■歩行者用道路の拡大

■グッドチャリライフ
（写真提供:We Love天神協議会事務局）

■天神地区ベビーカー貸出し

■「天神・おもてなしフォーラム」
（写真提供:We Love天神協議会事務局）

■「天神ガイドウォーカー」
（写真提供:We Love天神協議会事務局）

■朝カフェ

■朝カフェのワゴン

■大丸渡辺通り会場

■ソラリアプラザ会場

■メニューは和・洋・中華とバラエティに富む

■ふくこいアジア祭り

■福岡市役所ふれあい広場会場

■大賞受賞演舞
（写真提供:ふくこいアジア祭り組織委員会事務局）

■天神中央公園会場（写真提供:ふくこいアジア祭り組織委員会事務局）

■総踊り（写真提供:ふくこいアジア祭り組織委員会事務局）

■御供所ライトアップウォーク

■東長寺本堂

■承天寺開山堂

■承天寺洗濤庭

■妙楽寺開山堂

■妙楽寺方丈

■博多灯明ウォッチング

■旧大浜小学校「螺旋（らせん）」

■博多リバレイン

■旧大浜小学校

■櫛田神社「人魚」

■博多びあトピア（福岡国際会議場）

■博多高等学園「招福」

■MUSIC CITY TENJIN

■ドコモステージ/福岡市役所西側ふれあい広場

■福岡市音楽産業振興
基金の募金活動

■ソラリアプラザ ゼファ

■パサージュ広場 二胡の演奏

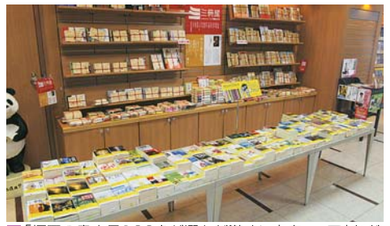
■キャナルシティ博多

■博多駅まつり

■BOOKUOKA

■カフェで再現!ブックレシピ 福岡市近郊15店で同時開催
「おさるのジョージセット」（冷泉荘 トラベルフロント）

■一箱古本市 in けやき通り
（写真提供:ブックオカ実行委員会）


■「福岡の書店員100名が選んだ激オシ文庫フェア」など
書店内で様々なイベントを開催（丸善福岡ビル店）

■BOOKUOKA
特製ブックカバーとしおり
（写真提供:ブックオカ実行委員会）

■〈共催イベント〉×福岡市文化芸術振興財団
「～南陀楼綾繁セレクト～フリーペーパー＝
小さなメディアの放つ光展」
（写真提供:ブックオカ実行委員会）

■〈共催イベント〉×九州宣伝会議
「編集者になろう!セミナー」
（写真提供:ブックオカ実行委員会）

「天神ピクニック」は、2004（平成16）年秋に本来の都心としてあるべき魅力を見直し、過密とコンパクトゆえに生じる課題の解決や公共空間および各種施設の利用方法を改善し、歩いて楽しい都心の再生に取り組むことを目的とした官民協働による社会実験としてスタートし、今年で5回目を迎えた。

もっともっとステキなまちへ

「天神ピクニック」

～『歩いて楽しいまち』『心地よく快適に過ごせるまち』『持続的に発展するまち』を目指して～

We Love天神協議会

天神ピクニックはこうして始まった

「天神ピクニック」は、「『憩いと魅力』の道路文化創造社会実験～天神モデルの形成と発信～」として、国土交通省の2004（平成16）年度「オープンカフェ等地域主体の道活用に関する社会実験」（申請者：天神モビリティタウン協議会）の採択を受け、実施されたものである。

実施にあたっては、商業事業者、交通事業者、NPO、福岡市役所・中央区役所等の行政機関、大学の専門家等を構成員とする天神社会実験実行委員会が7月に設立された。実行委員会の下には、1.アメニティ再生プロジェクト（屋外におけるアメニティ空間の再生）、2.安全快適環境プロジェクト（公共空間における安全快適環境の育成）、3.交通システムプロジェクト（歩行者と自動車の共生する都市交通システムの構築）、4.事業運営プロジェクト（まちづくりの自立的運営の確立）、5.調査プロジェクト（施策の効果・課題の調査・検証）の5つのプロジェクトチームが設置された。

アメニティ再生プロジェクト（サザン通り）（2004）

このプロジェクトチームが主体となり、「歩いて楽しい都心地区形成の実現」を目指して11月から12月にかけて歩行者天国、オープンカフェ、大型駐輪場の3時間無料化、おしチャリロード、一斉清掃、フリンジパーキング等が実施され、併せて評価や様々な調査を実施した。

フリンジパーキング社会実験（2004）

We Love天神協議会の設立へ

この「天神ピクニック」の社会実験終了後、実験の評価やこれからの天神のまちづくりについて検討がなされた。その中で、「エリアマネジメント」の必要性が謳われ、2005（平成17）年6月にWe Love天神協議会準備会が設置され、2006（平成18）年4月にWe Love天神協議会が設立された。つまり、2004年の「天神ピクニック」が天神地区におけるエリアマネジメント団体設立の大きなきっかけとなったといえる。

We Love天神協議会は、天神地区の企業、NPO団体、住民、行政、大学等104会員から構成されている。多様な活動主体と共に手を携えるまちづくりを推進し、人に優しい安全で快適な環境の形成、地区の価値・集客力の向上、地方経済の活性化、生活文化の創造などを目的としている。

協議会は2つの部会から構成されている。「まちづくり推進部会」（旧ガイドライン部会）では、設立後の平成18年から2ケ年をかけて、「天神まちづくりガイドライン」を策定した。このガイドラインには、地区の関係者が共有出来る「将来の目標像」や、その目標達成を図るための10の戦略を設定している。「地域連携部会」は6つのワーキングから構成されており、課題解決とガイドラインに掲げた目標達成のため様々な活動を日々展開している。

「天神ピクニック」は、協議会が主催となり2005（平成17）年以降も前年度の反省や効果検証の結果を踏まえながら毎年改善を加え継続実施してきた。

ストリートパフォーマンス（2005）

天神ピクニック2008

「天神ピクニック2008」は、9月13日から10月31日までの49日間にかけて開催された。前年からの継続事業に加え、3つの新規事業を実施し、本年4月に策定した「天神まちづくりガイドライン」に基づく施策を期間中に集中的に実施し、その有効性と効果を確認することに重点を置いた。

10月4日（土）・5日（日）の2日間を施策集中日とし、同日に開催される「ミュージックシティ天神」と連携を図りながら、歩行者専用道路の拡大、オープンカフェの設置、サイクルポストの適正利用の促進、おしチャリの啓発活動、清掃活動、ベビーカー貸出しサービス、またくる天神エコキャンペーン等を実施した。

オープンカフェ（2008）

新規事業としては、商業都市として天神がいかにしてアジアからの観光客を迎え入れていくかを考えるため、中国人観光客にスポットをあてた「天神・おもてなしフォーラム～アジア観光客を取り込む～」を各界よりパネリストをお招きし10月10日に開催した。天神地区の商業者・ホテル・旅行業関係者を中心に250名の方々に参加いただき、大阪ミナミでの先進事例や福岡市の施策紹介、現場での取り組みなどの紹介がなされた。

おしチャリ（2008）

天神のまちを「歩くこと」「知ること」でいつもと違う天神を一般の方々に体感していただき、愛着を深めていただく事を目的とした「天神ガイドウォーカー」を10月13日と19日の2日間実施した。各日2回ずつ合計4回実施し、多くの方々に参加をいただき盛況に終わった。水鏡天満宮や安国寺などの歴史旧跡から天神の歴史など約2時間のコースで実施され、途中、オープンカフェで休憩し、We Love天神協議会の活動紹介並びにPRを行った。

また、10月22日には地域住民と事業者が連携し、天神地区一体となった防災への取組み強化として「天神地区合同防災訓練」を実施した。福岡市域で震度7の地震発生を想定した避難訓練や、救出救護などの防災講習会を実施した。

天神地区合同防災訓練（2008）

天神ピクニックの課題

5回の実施により、「天神ピクニック」ならびにWe Love天神協議会の認知度は徐々には上がってはいるものの、天神の抱える問題や「天神まちづくりガイドライン」の中身をもっと多くの方々に理解・共有いただく事が必要といえる。活動には多くのスタッフが必要であり、協議会会員の活動への更なる理解と参加促進、一般の方々へのボランティアとしての活動参加促進も課題といえる。

また、短期間の社会実験、イベントにとどまる事なく、毎年の実施結果、検証結果を活かし、恒常化のための課題を明確にし、その解決に向けて一歩一歩進展していく事が必要といえる。「天神まちづくりガイドライン」に掲げた理想の天神像に近づくよう今後も「天神ピクニック」をはじめ様々な活動を実施していきたい。

今年で4回目の「朝カフェ」。「朝から始まる豊かで洗練された都市のライフスタイルの提案」を目的に、都心の屋外で朝ごはんを食べながら、会話と出会いを楽しんでもらおう、そんなイベントである。
「朝カフェ」の主催者は、福岡・朝の魅力向上実行委員会、て誰?……って皆さん思うはず。そこで、事務局員である「私」が、あまり知られていないその内幕について報告する。

福岡・朝の魅力向上「朝カフェ2005-2008」

～官民協働による自立した「まちの魅力づくり」事業を目指して～

(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　山下 永子

朝カフェ「前夜」 ーここからすべてが始まった!ー

朝カフェのアイデアは、2004年秋、VI都市塾1期生のワークショップから生まれた。VI都市塾とは、福岡市と民間企業によって設立されたビジターズ・インダストリー(略称:VI)推進協議会(2005年設立)が設置主催する同協議会の人材(都市の魅力プロデューサー)養成プログラム。その塾生たちが、福岡の新たな魅力づくりを目標に、福岡の魅力を検証、議論するなかで、発掘・発見し、辿り着いたキーワードが「朝」だった。

福岡と言えば、「屋台や中州等の夜のイメージばかり」。一方で「朝は遅く朝ごはんを食べられるところが少ない」。アジアの福岡を標榜するなら「アジア定番の湯気立つ通りの活気があってしかるべき」。そんな空間を創出し「朝が元気なまち」「'おはよう'が飛び交うまち」「朝ごはんがおいしいまち」「朝ビジネスが生まれるまち」づくりを提案してみよう!!!

これらの発想をとりまとめ、市長に提言したのが「福岡の朝・魅力向上計画」であり、そのプログラムの1つに含まれていたキラーコンテンツが「朝カフェ」というわけである。

都市観光推進の社会実験としてスタートした「朝カフェ2005」 ー計画が即実行されてしまった!ー

折角まとめた計画だから、と応募した2005年度国土交通省「都市観光の推進による地域づくり支援調査事業」に採択され、「朝カフェ」計画は、手にした300万円に逃げ道を失い、マスト実施事業になってしまった。心の準備も不十分のまま、急遽、塾生有志と市の担当からなる実行委員会事務局を設置、準備を開始したのが2005年4月のこと。開催日を10月に定め、

●図:「2005-2006」好評だった朝マップ&メッセージ

5ヶ月間で、協賛金や寄付金集め、趣旨に賛同してくれる出店者探し、公開空地の施設管理者に無料使用の交渉、衛生上の手続き、メディアへの広報等に走り回り、「何度も無理じゃないか」「お金が足りない」なんて泣きながらも、ようやく開催にこぎつけたのが第1回「朝カフェ2005」である。

苦労の甲斐があって、評価や評判、期待や趣旨への賛同は、想像以上に大きく、利用者のみならず、食育や学校関係者、地元飲食店からも「非常に斬新で良い活動だ」なんて褒められ、「継続して欲しい」の声に上機嫌になり、事務局員は感動のあまり、「また来年もやろう」と思ってしまった。それが苦難の始まりとも気づかないまま……。

嘆きと悟りの「朝カフェ2006」 ー運営的自立なしには「継続」はありえない!ー

期待に応えよう!そう思って準備に取り掛かった有志達は、現実の厳しさに直面した。国交省の事業という後ろ盾をなくし、資金集めに黄信号が灯っただけでなく、市を窓口として補助金を得て実施した事業だから、市も協力してくれたのだということを悟ったのである。

資金集めは困難を極め、市にお金を出してもらわない限り、運営資金は確保できないし、公の事業として実施できない。結局、市を通じVI推進協議会の事業費を拠出してもらい、ようやく開催できたのが「朝カフェ2006」だった。

終了した後に残ったのは「勝手なことを強引にすすめて」みたいな冷ややかな視線。しかし

写真:「2005-2006」元気がウリだった

写真:「2006-2008」専門学校生がインターンシップで参加

一方で「また来年もやってね」の利用者や関係者の期待はさらに高まり……事務局はこのギャップと「続けたいけどこのままじゃ無理」的ジレンマに悩まされ、そして腹を括って、「運営的自立」を模索し始めた。

構造改革による自立に挑んだ「朝カフェ2007」 ー公金を投入せずも公の事業とみなされる組織づくりに挑戦!ー

事務局員達は、真剣に議論を始め、抜本的な改革に取りかかった。まず課題を①公に認められる目的と意義の明確化、②公とみなされる組織・体制の構築、③自前の資金源の確保、の3つに整理し、それぞれの対応策を検討していった。

①の目的には新たに「公開空地の有効利用」という視点を組み込んだ。それまでの「集客交流」や「食育」にこの目的を加えることで、施設管理者の参加意識を喚起するとともに、市の都市景観の観点からの関心や協力を得られるようにした。②として正式な実行委員会を設立した。九州大学大学院の出口教授を委員長に迎え、We Love天神協議会、福岡青年会議所、福岡市役所、飲食系民間企業を委員とする組織を立ち上げ、社会的な信頼を獲得できるようにした。また、We Love天神協議会の参加によって、公開空地の活用の道を拓いた。③では自前のフリーペーパーを製作・発行することによって、協賛金から広告料収入へ、という主要資金源の転換を行うとともに、施設管理者にも負担金をお願いし、共同事業としての参画の流れを作り出していった。そういう改革に挑みながら実施したのが「朝カフェ2007」である。

●図:「2007」爽やかさを狙ったロゴだが…青と食べ物は合わなかった

文化創造実験空間としての「朝カフェ2008」 ーようやく先のビジョンが見え始めてきた!ー

2008年は「まちに溶け込む文化的・情景的空間と魅力づくり」に挑戦し始めた。秋の風物詩として定着してきた「朝カフェ」を、「美しく魅力的な文化」に磨き上げていく段階にようやくたどり着けたと言えるのかもしれない。

●図:「2008」ロゴ刷新(当面コレ)

写真:「2008」専用ワゴンを製作

写真:「2008」文化的雰囲気づくりを意識

まだまだ課題はあるけれども、元気の良さや騒々しさを抑えながらも、店舗は昨年よりも売上を伸ばしたところが多かった。今後の展開に向けて、1つのビジョンが開けてきたのが「朝カフェ2008」なのである。

「福岡・朝カフェ・モデル」の確立に向けて

私は事務局員として朝カフェ運営に参加する一方で、研究者としては研究の対象として「朝カフェ」を眺めてきた。なぜなら、この「朝カフェ」の事業化のプロセスは、今後、民主体による官民協働の魅力づくりイベントの貴重なモデルになっていく可能性を秘めていると感じていたからだ。

「朝カフェ」が真の自立的事業化を実現し、まちの魅力創造装置に発展していくには、まだまだ長い時間がかかることだろう。しかし、「朝カフェ」が持つ「市民に一緒に魅力づくりに参加してみようと思わせる磁力」、「朝カフェ」で育まれた「まちの魅力づくりに取り組む官民協働の意識」「それを事業に落とし込み運営していく知恵」、等の財産はすでに大きな価値を生み出している。

「朝カフェ」をやれる福岡市天神は凄いと思う。もっと磨きをかけて「福岡・朝カフェ・モデル」を確立していきたいと考えている。

●図:朝カフェの歩み(課題と評価)

	朝カフェ2005	朝カフェ2006	朝カフェ2007	朝カフェ2008
1.事業概要				
①実施主体	国土交通省VI推進協議会「VI都市塾」	VI推進協議会「有志チーム」(VI都市塾OB+市役所)	福岡・朝の魅力向上実行委員会(官民協働組織)	福岡・朝の魅力向上実行委員会(官民協働組織)
②事業費	730万円	600万円	542万円	418万円(予算)
③資金源	・国土交通省の助成 ・地場企業等の支援	・福岡市の補助金 ・地場企業等の支援	・広告費(フリーペーパー) ・施設負担金 ・地場企業等の支援 ・(財)まちづくり市民財団助成金	・広告費(フリーペーパー) ・施設負担金 ・地場企業等の支援
④実施地点	3地点(IMS、岩田屋、大丸)	4地点(IMS、岩田屋、大丸、警固公園)	5地点(IMS、ソラリアプラザ、天神コア、大丸、警固公園)	3地点(IMS、ソラリアプラザ、大丸)
⑤出店店舗数	8店舗	12店舗(+警固カフェ:昼間で継続)	15店舗	12店舗
⑥協力コラボレーション	・グリーンバード福岡清掃活動 ・福岡市職員ボランティア	・グリーンバード福岡清掃活動 ・専門学校インターンシップ ・福岡市職員ボランティア	・グリーンバード福岡清掃活動 ・健康チェックサービス ・シニアボランティア ・水産高校・専門学校インターンシップ ・福岡市職員ボランティア	・グリーンバード福岡清掃活動 ・スポーツ健康チェックサービス ・専門学校インターンシップ ・福岡市職員ボランティア ・市民音楽家による演奏ボランティア
2.主要評価データ(注)①～⑥は利用者アンケート調査、⑦福岡県民に対するインターネット調査				
①延利用者数	約3,500名	約4,500名	約4,200名	未確定
②販売額	約87万円	約146万円	約160万円	
③利用者満足度	満足54%　やや満足40%	満足68%　やや満足28%	満足65%　やや満足27%	
④利用者リピート意向	利用したい95%	利用したい97%	利用したい97%	
⑤利用者認知度	-	-	認知度74%	
⑥利用者居住地	福岡市75% 福岡市以外福岡県22% 福岡県外3%	福岡市75% 福岡市以外福岡県18% 福岡県外7%	福岡市76% 福岡市以外福岡県18% 福岡県外4%	
⑦天神ユーザの認知利用経験	-	-	認知度53%　利用経験者出現率8%	
3.運営課題と解決に向けた方策・新規取り組み(これまでの改善点)				
①終了時の課題	・VI事業としての継続の妥当性 ・朝食や挨拶などを加えた新イメージの構築 ・集客に向けたアピールの強化	・資金源の確保・運営体制づくり ・公開空地の利用意義・文化としての空間づくり ・効果的な広報による初日の集客	・公開空地の利用意義 ・修景・デザインの充実 ・施設管理者へのインセンティブの提供 ・朝ビジネスの支援	未確定
②課題解決に向けてとった方策新規取り組み	-	・天神ピクニックとの連携 ・専門学校とのインターンシップ連携 ・大丸のテナント店舗が「食育」をキーワードに出店	・産官学協働による実行委員会の設立 ・民の資金のみで事業実施 ・施設管理者がブースの製作費用を負担 ・財団の助成により専用WEBを開設 ・民有地でやりたいという施設管理者が初参加 ・公開空地に関する調査 ・音楽演奏等のイベント実施	・エリアの縮小・ロゴの刷新・のぼりの廃止 ・専用カフェ台の製作 ・フリーペーパーを使った公開空地に関する理解促進 ・公開空地利用ガイドライン策定実験としての位置づけ ・出店者への早期情報提供 ・早期メディアへのアピール(テレビ生中継を実現)
4.その他(波及効果)				
○その他	・朝カフェという言葉が全国的に注目され、仙台などでも朝カフェという名称を持った事業開始 ・宮城県で開催された国土交通省の成果発表会で絶賛	・施設管理者が電気工事を実施 ・出店店舗が大丸にテナント入居 ・複数の市町村からヒアリングを受ける	・一般市民が飛び入りで音楽を演奏 ・朝食を提供するカフェが新しくオープン	・「じゃらん」が朝カフェ期間に合わせた商品を企画

福岡市役所ふれあい広場会場（2008）

ふくこいアジア祭り

ふくこいアジア祭り組織委員会 事務局長　酒匂 彰

～福よ来い！の思いを込めて踊る～

開催のきっかけと発展の経緯

ふくこいアジア祭りは、有志が中心となり2000(平成12)年に始まったものです。親富孝通りの商店主を中心としたメンバーが地域のイメージアップ・活性化のために全国で広がりを見せる【よさこい】を取り入れた祭りを始めました。その際、【よさこい】をただ真似るのではなく、福岡らしさを織り込むべく、「福よ来い！」との願いを込めて踊る、さらに福岡からアジアへ発信したいとの思いを込め名称を決定しました。初代の実行委員長は溝上氏（元親富孝通り商店主）。旅行が好きな溝上氏は外国で「福岡ってどこ？」といつも訊かれており、その知名度の低さを憂えて福岡にはこんな祭りがあるといえるものを作りたいと考えました。当初は商店主が中心でしたが、親富孝通りだけでなく天神のそして福岡の祭りとしたいとの考えから規模が大きくなり、行政・財界などに支援して頂くようになりました。

参加者と福岡のイベントインフラ

都会の中心で踊れるということで大変人気が高く、九州中から参加いただいています。例年は100チームで4,000人規模です。会場が比較的限られているので、人数を増やすのが難しいことが悩みの種です。天神の真ん中を中心に、これまで博多駅や百道エリア等で行ってきましたが、移動に利用する大型バスの駐車場の確保等が難しく、福岡は街を舞台としたイベントをスムーズに行うインフラがもっと整うとよいのにと感じることがあります。また、どんたくや山笠といった伝統イベントは地元の理解がありますが、新しいイベントに関しては課題も多く、思ったように道路や公園などの空間を使えないこともあります。

これからの展望―10周年に向けて―

福岡には秋にイベントが多いので他と連携し、時期を同じにして観光客にアピールしていきたいと考えています。そうすることで福岡の街のアピールになり、観光旅行のパッケージとして売り出すことも可能になると思います。最近はちょうど同じ時期に開催される中洲まつりの前座をつとめることもあります。また、アジアに向けてのアピールも視野に入れて更なるスケールアップを目指しています。過去には韓国のチームに参加いただいたこともあります。ふくこいアジア祭りのPR隊は、去年まで3年度連続で「日韓交流おまつり」（ソウル）に、今年6月は釜山で「大韓民国祝祭博覧会」に参加した実績があります。今後は、韓国だけでなく、アジアの地域全般と交流をしていきたいと考えています。来年はふくこいアジア祭りが開催されて10周年を迎えます。これを機に、今まで培った経験を基に新しいチャレンジも行いもっともっと盛り上げていきたいと思います。

■ふくこいアジア祭りの基本理念

青少年の健全育成

地元に受け継がれてきた民謡やお囃子を元に創られた楽曲を使用することは、先達の守ってきた文化に触れ、理解し、誇りを持つきっかけになります。さらに自身の文化に誇りを持つことは他の文化を尊重出来ることにつながり、真の国際人としての将来性を高めていきます。また、祭りを通じて生まれる連帯感や達成感を体験することにより仲間との絆、他者への思いやり、地域との繋がりが深まります。

地域活性化と地域間交流

全国各地よりたくさんのチームが「ふくこいアジア祭り」に集まります。チーム育成や会場運営を含めた地域住民の祭りへの参加は、地域を元気にし賑わいをもたらします。また、この祭りを開催することにより、他の地域との新たな交流の輪が深まります。さらに交通・宿泊・飲食・お土産など様々な経済効果が期待されます。

アジアとの交流

アジアの玄関口である福岡から「ふくこい」を発信することにより、文化や国境の壁を越え、踊ることを通してお互いを理解できる新たな交流がアジア中に広がります。

福岡市役所会場（バックパネルもまだない頃）（2001）

韓国仁川祭り（韓国の学生チームとの交流を行う）（2003）

JR博多駅会場（現在は改装中）（2005）

アクロスシンフォニーホール会場（2005）

大韓民国祝祭博覧会（福岡市のPR隊として参加）（2008）

御供所ライトアップウォーク

福岡市都市景観室

福岡市博多区御供所町。博多駅からほど近い場所ですが、多くの寺社や町家が残り、太閤町割りの名残をとどめる風景が見られる貴重なエリアで、福岡市では周辺一帯を1998(平成10)年に「都市景観形成地区」に指定し、住民・寺社・行政が一体となって歴史的景観の保全・創造に努めています。

そんな御供所地区の素晴らしさをより多くの市民に知っていただき、博多の歴史や文化を身近に感じて欲しいという思いから、実行委員会を組織し「御供所ライトアップウォーク」を開催しています。

これは、御供所地区内の由緒ある寺院の建物や庭園をライトアップするもので、3回目となる今回は10月24日(金)から26日(日)の3日間、承天寺、東長寺、妙楽寺の3寺院を会場として行いました。各施設のライトアップは、夜間景観の魅力を最大限発揮するため、照明デザイナー・松下美紀氏に総合プロデュースを依頼し、12社の照明メーカーがそれぞれのデザインを行いました。また、サブテーマに「地球に優しい光づくり」を掲げ、器具とデザインの工夫により使用電力量を前回比6割程度に抑え、美しさを保ちつつ環境への配慮も行いました。

さらに、期間中は博多祇園山笠舁き山展示や博多松囃子稚児舞の披露、地域主催による博多灯明ウォッチングなど、博多の歴史や文化に親しんでいただく様々な催しが行われました。

特に今回は「御休憩処　博多夜市」と名付け、承天寺の境内の間を通る道路を歩行者天国にして生け花などで飾ると共に、隣接する承天寺境内で博多にゆかりのある饂飩・蕎麦・博多織・博多曲物などの販売を行うといった憩いの空間を設け、多くの方に楽しんでいただきました。

地域の魅力に、ライトアップの美しさと様々な催しが合わさり、期間中の入場者は3寺院合計で2万7千人を超え、より多くの市民に御供所地区の魅力に触れていただけました。

近年、御供所地区においてもマンションの建設などの開発が行われています。この御供所ライトアップウォークを始めとした取り組みにより、多くの市民に博多の貴重な歴史的景観の保全・創造に関する理解を深めてもらい、御供所地区の特性を生かしたまちづくりをさらに進めて行きたいと思います。

東長寺

博多灯明ウォッチング

博多区役所企画課

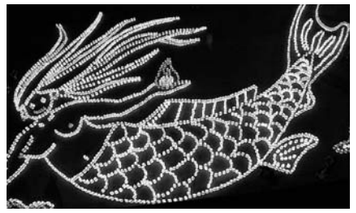
「博多灯明ウォッチング」は、灯明の仄かな灯りで博多のまちを照らし出す情緒あるお祭りで、1994（平成6）年のスタートから今年で14回目を迎えます。スタート当初は街なかの通りや神社・仏閣に灯明を並べるだけのシンプルなものでしたが、現在は、最大80mにもなる灯明の地上絵も描き出され、華やかさも演出するようになっています。今年は10月18日と25日に行われましたが、両日とも天候に恵まれ、櫛田神社・旧大浜小学校・博多高等学園に描き出された地上絵や街なかに飾られた灯明を多くの人が訪れて楽しんでいました。

「博多灯明ウォッチング」が行われるのは冷泉・奈良屋・大浜・御供所の4地区からなる博多小学校区です。運営は4地区のまちづくり協議会の連合体である「博多部まちづくり協議会」であり、「博多灯明ウォッチング」はこの協議会の設立を機にスタートしました。また、事務局は4地区のまちづくり協議会の持ち回りで行われており、今年は冷泉地区が担当しています。

設営作業は当日の午後から開始します。作業はまちづくり協議会のメンバーだけではなく、いろいろな地域団体が参加し、子どもからお年寄りまで多くの住民が一緒になって、灯明をつくり並べていきます。また、近隣の専門学校生等も参加しており、世代間、地域内外との交流の良い機会となっています。

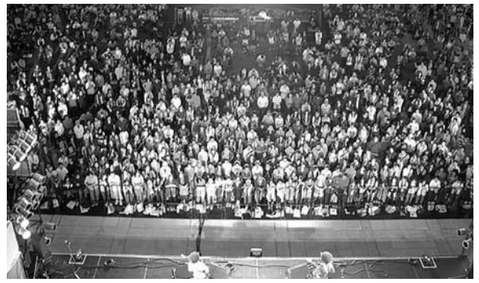
ただ、地域のまちづくり活動としてはじまったこの「博多灯明ウォッチング」も、回を重ねる毎に注目が集まり、多くの新聞や雑誌等で取り上げられるようになりました。このため、問い合わせの対応等事務的な負担も大きくなっており、今後の運営について考えていく必要があると思います。

大浜地区での作業の様子


冷泉地区の灯明地上絵「人魚」

「博多灯明ウォッチング」灯明アーティスト
尾方 孝弘さん

・博多ではじまった「灯明ウォッチング」は、今では室見川や美野島など、市内各地でまちづくり活動の一環として広がりをみせるようになりました。
・その理由として、灯明は紙袋に砂とロウソクを入れるシンプルな構造で、誰でも参加できること、地上絵はたくさんの灯明を使って描くので、大勢の人の協力が必要なところがまちづくり活動に適しているためだと思います。
・さらに、作成に携わった地上絵が夜のまちに浮かび上がるときの感動、それを多くの人が訪れて見てくれるという喜びも外すことはできませんね。


MCTのメインステージのドコモステージ（福岡市役所西側ふれあい広場）

MUSIC CITY TENJIN　ミュージックシティ天神実行委員会

～街中に音楽が溢れ出す。九州最大級の音楽フェスティバル～

MISUC CITY TENJINとは?

商業やビジネスなどが集積され、古くから文化芸術活動も盛んな活力あふれる街として全国的にも注目を集める福岡・天神。音楽による街の賑わい創出、そして福岡の音楽環境向上を願い、6年前の2002(平成14)年からはじまったイベントが「MUSIC CITY TENJIN」(以下、MCT)である。福岡市と福岡都心部の事業者、および地元メディア各社などが実行委員会を組織、「音楽産業都市・福岡」を実現するために、「SUCCESSION～音楽的感動を、世代を超えて伝え継承していく～」をコンセプトに、音楽による天神地区の一体化と、文化育成のムーブメントを創り出すきっかけにすることを目的に行っている。

MCT2008は全35会場で行われ、出演者はプロ・アマチュア含め270組、2日間合計で11万人以上を集客。ライブ会場で行ったアンケート(※1)の結果では、経済波及効果が13億8,904万円(※2)に上るなど、九州・福岡の音楽イベントとして定着し、その結果、少なからず福岡の都心部一帯に音楽による賑わいと活気を呼び起こす事に貢献出来ているのではないかと思う。

※1 2008(平成20)年10月4日・5日ライブ会場にて実施。アンケート回収件数477件、※2「交通費」「飲食・喫茶費」「買い物」「宿泊費」「その他」の金額、宿泊者/日帰り者の割合、来場者総数の調査データを用い、産業連関表により算出

ポイント	
1	音楽による街の賑わい創出
2	福岡の音楽関連産業の振興
3	市民参加による文化的事業の創出
4	メディアと連動した音楽関連の活動紹介・情報発信の仕組み
5	新人アーティストやアマチュアのチャンスの場づくり
6	福岡と他地域（国内・海外）とのコミュニケーション

MUSIC CITY TENJIN 2008

今年2008(平成20)年は10月4日、5日の2日間開催。1年目に一般公募ミュージシャンとして出演、その後、7年連続の出場を果たし、2007年から2年連続でメインステージへの登場となった風味堂を始め、pe' zmoku、鶴、矢野真紀、曽我部恵一、原田郁子などのプロミュージシャンや、一般公募から選出されたアマチュアミュージシャン40組（応募数198組）など

街角の設置されたSTREET STAGE（全14会場）
観覧は全て無料

広がり続ける MUSIC CITY TENJIN

2008(平成20)年から同時期に行われる「博多駅まつり」や「キャナルシティ博多」と連携を図り、博多地区に初めてMCTのステージが登場。今後は、天神地区だけではなく福岡の都市部一帯に広く音楽ステージを設置することも検討していきたい。今回で7回目を迎えたMCTは、全国でも類を見ない「音楽都市・福岡」ならではのイベントとして定着、そして発展してきている。今後は福岡から全国へ、そしてアジアへ、福岡の音楽文化を発信していくとともに、福岡の都心部一帯に音楽による賑わいと活気を呼び起こすため、MCTをより進化・発展させていきたい。

今年から登場したキャナルシティ博多会場

BOOKUOKA（ブックオカ）　ブックオカ実行委員会/石風社　藤村 興晴

～福岡を本の街に～

本を介して「人」と「街」を結ぶ

福岡市中央区の赤坂―警固間を東西に結ぶ通称「けやき通り」。1キロ弱にわたってカフェや美容室、ギャラリーが立ち並び、新緑の春、そして紅葉に染まる秋にかけて、絶好の散歩コースとなる。

そのけやき通りを中心に、福岡市内、そして県内の書店やカフェをまきこんで行われる「本のお祭り」、それがブックオカである。2006年春、けやき通りの書店「ブックスキューブリック」の大井実氏、そして編集者兼ライターで「yojohon（ヨジョーホン）」なるネット古書店を営む生野朋子氏、そして筆者の3人で発案した。

きっかけはこの3人がけやき通り近くの居酒屋で落ち合い、杯を交わすなかで、東京の谷中・根津・千駄木界隈の下町で行われている「一箱古本市」なるフリーマーケット型の路上古本市の話題となり、「福岡でもやってみよう。けやき通りは絶好のエリアだ。本が地域の活性化に貢献する良いチャンスなんじゃんないか」と大井氏が述べたのを受け残る2人が賛同。映画「七人の侍」よろしく、さらに本好きの有志を募り、10名弱の実行委員会が誕生したのである。

「本」をテーマに福岡初の取り組み

幸い、委員の中には書店や出版社のみならず印刷、広告やWeb開発、デザインなど、イベント運営のパーツを担う「本職のプロ」がそろっていた。

また元来「お祭り好き」な福岡の街にあって、これまで映画や音楽、演劇など他ジャンルのイベントは行われていたものの「本」をテーマにしたものはなく、いわば未踏のフロンティアを拓くようなスリルがメンバーの士気を高めた。さらに全国的に「本離れ」が進むなか、国内屈指の激戦区でもある福岡市の書店、さらにはマスコミが、一服の清涼剤としてわれわれの活動を歓迎してくれたことも追い風となった。

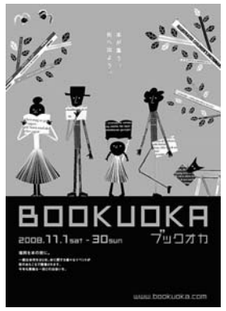
20～40代がつくる「大人の学園祭」

委員の会合は毎回、各人がアイディアをもちよりながら、「お金をかけずいかに効果をあげるか」という制約の中でワイワイと雑談風に進められた。例えば20代のメンバーは、絵本に登場するメニューを実際にカフェで提供するというブックオカの人気企画『カフェで再現!ブックレシピ』など、活字業界のイベントにありがちな「説教臭さ」を自然と排除してくれたし、発起人の一人である生野氏やデザイナーの酒井氏が生来のセンスで若い層にも響くデザインをこらしてくれた。

広報や協賛集めについては30、40代のメンバーが各人の人脈を活用してその任にあたった。語弊はあるが、世代を超えた「学園祭」のような手づくりの熱気が運営を支えているのである。

幸い今年で3年を経過し、「本との出会い」を提供するさまざまな取り組みが県外からも評価され、今年は遠く仙台からも見学者が来場した。

今後の展望らしきものはまだ漠としているが、継続と惰性は紙一重。いかにその熱気を伝えつづけられるかがキーポイントとなるような気がしている。



2008年ポスター

2008年リーフレット（抜粋）

一箱古本市

カフェで再現!ブックレシピ

ひとはこ豆本市

文化芸術情報館アートリエ/(財)福岡市文化芸術振興財団
宮崎 由子さん

・カフェアートリエでは東京のライター南陀楼綾繁さん選出の56誌を展示する「フリーペーパー=小さなメディアの放つ光」展を開催。当財団でも、市内のアートに関する様々な活動を紹介する機関誌「wa」を年に4回発行しており、「wa」のフェアを行う計画の中で、無料で配布する媒体=フリーペーパーとは?と思いを巡らせたことが本展のきっかけでした。
・今回はBOOKUOKAと共同企画のため、より多くの方に知っていただき、11月9日のトークイベントには県外から駆けつけてくれた制作者の方もちらほら。書物のあり方の一つとして、フリーペーパーを楽しんでもらえたのではないかと思います。
・BOOKUOKAのような本のイベントが、他都市でも盛り上がってきていると聞いています。嬉しいことにこのフリーペーパー展も、他都市で順次開催される予定です。

天神エフエム株式会社
三好 剛平さん

・BOOKUOKAには第1回目から実行委員会に参加させて頂いています。本の魅力を様々な角度から紹介するこのイベントのなかで、コミュニティFM局である私たちはラジオ特番とイベントを行いました。ラジオではまず繰り返しBOOKUOKAを紹介し、BOOKUOKA自体に馴染んで頂くことを目指しました。さらに絵本の朗読コーナーや、名作文学をテーマにした選曲番組などを設けることで、様々な切り口で本という文化に親しんでもらえるよう工夫しました。
・イベントでは、一般の方からご寄贈頂いた書籍を自由に閲読・持ち出し・持ち込み頂ける「天神文庫」という企画を開催。天神の真ん中、ソラリアプラザのイベントスペース・ゼファで、気軽に本と出会える機会を創出できたことで、多くの来場者に喜んで頂けました。

ふくまめプロジェクト
古賀 涼子さん

・「豆本"作家」を全国から20名募り、11月16日(日)～11月24日(月)の9日間に渡って開催したのがブックオカ共催イベント「ひと箱豆本市」です。一人一箱のスペースで、オリジナルの手作り豆本を展示・販売し、その様子は小さな市場のようで、「駄菓子屋みたい」とのお客様の声もありました。
・私は約3年前、新聞記事で手作り豆本の事を知り、すっかり夢中になりました。今年の3月に初めて福岡で手作り豆本展を開催し、多数の方から「また開催してほしい」との声をいただきました。そこで、せっかくの福岡の本のお祭りにのらない手はないと、思いきって豆本展の企画をブックオカへ持ち込んだのでした。
・大規模なイベントのひとつとして参加した経験がなかったので、最初はわからない事だらけでしたが、ブックオカ全体の事がわかってくるにつれて徐々に感覚がつかめていく気がして面白かったです。「福岡には、面白い事が好きだったり熱い情熱を持ってたり粋だったりする人がこんなに大勢いるんだ!」と気づけた事は、大きな収穫です。

*豆本とは、小さな手のひらサイズの本の事。お菓子のオマケなどでも見かけますが、近年では自分の手で豆本を制作し、展示や販売活動をする人が増えてきています。

まちかどイベントの舞台である福岡市の現状・取り組みはどうだろうか。
趣味・嗜好を超えた様々な可能性を秘めた「文化」への福岡市の取り組みを見てみよう。また、人が集まるところには、新たなまちかどイベントのチャンスがある。2011(平成23)年のまちの大転換期に期待が高まる福岡市の集客への取り組みを取り上げる。

福岡市の文化・集客への取り組み

～文化の可能性・集客の新たなチャンス～

(財)福岡市文化芸術振興財団の取り組み

(財)福岡市文化芸術振興財団 事業課事業係長　高橋 栄幸

文化芸術を広く市民に

(財)福岡市文化芸術振興財団は、平成11年に福岡市が全額出資のうえ、「市民の文化活動の振興に関する事業を行い、もって市民の充実した生活の実現と薫り高い市民文化の振興に寄与すること」を目的として設立され、次年度で10周年を迎える。つまりは、市民と文化を「つなぐ」ことをテーマに様々な事業を展開してきた。「つなぐ」ということは押し売りではなく、また逆に少数のマニアックな人たちのために行うものではない。演劇、ダンス、美術、音楽などさまざまなジャンルの芸術があり、市民はそこから好きなものを選択することができるが、なじみの少ない伝統文化や先進的で前衛的な舞台芸術など、一般に市民の目に触れにくい文化芸術を広く紹介したり、子どもやお年寄り、障がいのある方など、文化芸術に接する機会が少ない人たちにも「つなぐ」ことが公的財団の使命と考えている。

文化芸術による コミュニティの活性化

公的財団の事業であり、商業性に特化しないため、文化芸術を通じて、教育、福祉、まちづくりなどさまざまな二次的効果が期待できる。最近の傾向として、コミュニティの活性化に文化芸術の影響力が高いことが認知され、全国でもさまざまな取り組みが見られるが、当財団ではその効果に期待し、地域や学校へアーティストを派遣し、体験型のワークショップを展開してきた。特に、性別・年齢、障がいのある無しに関わらず、誰でも参加することができ、身体で自由に表現をするコンテンポラリー・ダンスの可能性に着目し、アーティストと一般市民がいっしょに作品を創作するなどの創造的な活動を行う「コミュニテイ・ダンス」で「まちづくり」の一助を担っている。

博多灯明ウォッチングとダンス

特に平成19年度に行ったダンスワークショップは、博多の町の風物詩でもある「博多灯明ウォッチング」とのコラボレーションをめざし、韓国の振付家チョン・ヨンドゥさんを講師に招き、10歳から63歳まで、ダンス経験が全くない人も含め20人が参加して行った。このワークショップは奈良屋まちづくり協議会の協力のもと、「絆」をテーマとした地域性の強い作品を作り、「灯明ウォッチング」の開催場所である博多小学校でその作品を披露した。フルートの演奏もあり、幻想的な雰囲気のなかでのダンスは、まさに地域で作られたダンスだった。参加者は校庭にろうそくを灯したり、片づけを手伝ったりするなど、地域の人たちとの一体感を楽しむこともなった。

キーワードは子ども

また、財団は将来を担う「子ども」を対象とした事業にも力を入れている。さまざまな文化芸術を体験して、表現する楽しさを知ってもらうために、演劇、伝統文化(文楽・能楽)、ダンス、音楽など、アーティストを学校に派遣して体験型のワークショップを開催している。特に演劇ワークショップ(参加体験交流型プログラム)は平成16年度より本格的に取り組み、南区の若久小学校をモデル校として長期的なワークショップを継続している。地元の演劇人をファシリテーター(進行役)として育成し、中央から専門家を呼ばなくてもワークショップを開催できるようになった。ファシリテーターたちは自主的にワークショップ・プログラムを開発するなど研究に余念がない。先生や保護者からは、「自分の意見を言えるようになった」「友達を助け合う心が生まれた」などの声が聞かれた。

文化芸術の効用

趣味や嗜好としてとらえられてきた文化芸術は、福祉や教育、まちづくりなどのツールとしての有効性が認められてきた。心を豊かにすることができ、生きがいともなる文化芸術の社会的な可能性、パワーを信じて今後も事業を展開していきたい。

(財)福岡市文化芸術振興財団
http://www.ffac.or.jp/

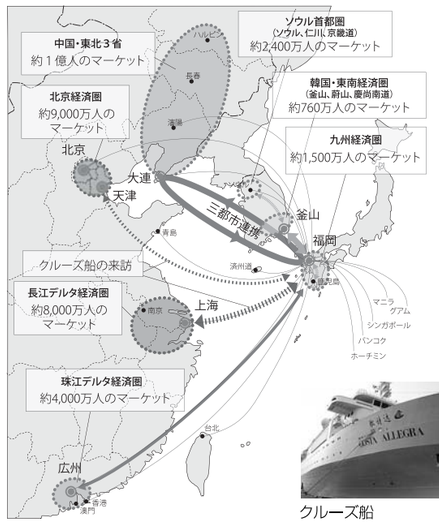
九州・アジア新時代の交流拠点都市づくり

福岡市経済振興局集客交流部集客企画課企画係

ゲートウェイ都市を目指して

福岡市では、官民一体の組織であるビジターズ・インダストリー推進協議会を推進母体として、"アジアの人々が滞在・交流する、アジアから一番近い日本の都市"にステップアップするため、北東アジアにおける観光交流圏を形成し、経済・文化・市民レベルでの多様な相互交流を活発化していくことを目的として、「アジアゲートウェイキャンペーン2011」を実施している。

九州新幹線の全線開通(博多～鹿児島)や新博多駅ビルの開業、さらには韓国高速鉄道「KTX」(ソウル～釜山間)の専用線での全線運行など、九州やアジアから更なる集客交流の拡大が見込まれる平成23(2011)年を好機と捉え、姉妹都市でもある韓国・釜山広域市との共同事業やクルーズ船の誘致・受入、アジア都市との多様な交流の拡大を進めていく。



クルーズ船

釜山・福岡アジアゲートウェイ2011がキックオフ

釜山広域市との共同事業では、これまでの強固な関係を基盤としながら、両都市を含む海峡圏を一つの観光交流圏として発展させていくことを目標として、①プロモーション②受入体制③人材ネットワーキングの3つのプロジェクトを「釜山・福岡アジアゲートウェイ2011」として実施していく。

今年度はキックオフの年として、①プロモーションプロジェクトでは▽ロゴや映像、パンフレット等のツールの制作▽両国内外への共同観光プロモーションなどを実施する。

また、②受入体制プロジェクト③人材ネットワーキングプロジェクトでは、▽両国の観光客のニーズ、観光動態調査▽天神駅周辺の空間評価研究▽集客産業に携わる若手ビジネスパーソンの交流会などを実施する。

さらに来年度からは、環境や生活、カルチャー、スポーツなど、テーマに沿った交流事業をシンボリックに展開し、メディアを通して両都市の市民が共有できる価値観の創造と総合理解を図ることで、互いの行き来を活発化させ、釜山広域市と福岡市の交流を促進・拡大させる。

釜山広域市との共同事業

クルーズ船の誘致・受入体制の充実

平成20年度の23回の寄航では約3万人の来訪者があった大型クルーズ船も、来年度以降はさらに多く博多港に寄港する予定である。本市のアジア受入の試金石として、交通拠点やショッピングエリアなどでの歓迎イベントの実施や、銀聯(ぎんれん)カードの導入や案内サインの整備など受入体制の充実を図る。

アジア都市との交流拡大

福岡と釜山広域市との連携を核として、中国の各地域(大連・広州・上海等)との交流を深めていくなど、アジアの重点都市・エリアとの連携を強化していく。

釜山・福岡アジアゲートウェイ2011 ロゴマーク

街は舞台であり、都市は劇場である。文化と経済を結びつけるフェスティバルを通じて、魅力的なまちづくりが可能になる市民の愛市精神を高める「まちかどイベント」の可能性について、内外の事例に学ぼう。

まちかどイベントと都市

～都心を劇場に変える「まちかどイベント」～

大阪府立大学 特別教授・観光産業戦略研究所 所長/イベント学会 副会長/（財）福岡アジア都市研究所 企画委員　橋爪 紳也

元気な地方都市の秘訣

知人のジャーナリスト、高松平藏さんの講演を聴く機会があった。『ドイツの地方都市はなぜ元気なのか』（学芸出版社）の著書がある高松さんは、長年、ドイツのバイエルン州にあるエアランゲン市で暮らしている。同市は、ニュルンベルグ市を中心とするメトロポリタン地域に所属、2002年に街ができてから1世紀の節目を祝った歴史都市だ。地方分権が定着し小規模な自治体が多数を占めるドイツでは、人口10万人ほどだが都市としての機能が一式そろっているがゆえに「大規模都市」と呼ばれている。

1970年代には、自転車専用道路を整備、環境共生都市の先駆となった。また毎年、文学のフェスティバルである「詩人の祭典」を、2年ごとに「国際コミックサロン」「フィギュアー・フェスティバル」といったように、文化的な催事を展開している。いっぽう産業施策では、90年代には医療関連の企業誘致に力を入れ、医療・健康都市として存在感を示している。

文化施策と産業施策、双方の関係が有機的だ。営業税の一部を、文化政策に還元している。その目的は、なによりも市民の生活の「質」をたかめることにある。暮らしやすく文化的な都市という個性を確立、市民のわが町への誇りをたかめるとともに、新しい企業が立地するうえで優位な条件として呈示しようというわけだ。

エアランゲン市では「文化は経済のエンジン」と位置づけられているという。経済活動をパンにたとえるのであれば、文化は「酵母菌」なのだという。「日本の地方都市に何が必要か」という問いかけには、縦割りの現状を高見から見渡す「鳥瞰スキャン」の実践、継続的な地域情報の発信、都市のアイデンティティを主張するための文化政策の重点化、NPOなど中間集団を支援するインフラの検討と整備、加えて特定分野におけるローカルヒーロー（地域で活躍する人材）やグローバルプレーヤー（世界に通じている人材）の発見と支援策の必要性を高松さんは強調した。

ドイツに限るものではない。欧州の各都市ではそれぞれ個性的なフェスティバルがあり、住民の誇りとなっている。もちろん伝統的な催事に由来する例もあれば、新たに創造された文化イベントもある。事情は日本でも同様だが、概していえば私たちは文化的な催事と産業施策とを結びつける意識が弱いのではないか。農業や製造業だけではなく、文化の生産と消費の仕組みもまた、「地産地消型」にしなければいけないということだろう。

イベントによる都心の劇場化

文化と産業を有機的に結びつける手段のひとつに、市街地全体を非日常性の強い劇場空間に変えるまちかどでのイベントの展開がある。

フランスの事例を紹介しておきたい。ノルマンディ地方にあって大西洋に臨む港湾都市ル・アーブルは、戦後復興によって刷新された市街地が世界遺産に登録されたことで知られる。その街区を舞台として、ナント市を本拠とするロワイヤル・デュ・ルックスという劇団の公演が恒例となっている。私が見た一昨年の演目は、小説家ジュール・ベルヌの生誕百周年を記念、木製のロケットで到着した女の子が巨大な象に乗ったスルタン一行と交流をはかる様子を四日間にわたって展開するという世界最大の操り人形芝居であった。広場や街路、海岸など市街地全体をステージとして物語が進行する。文字通り、都市を劇場に転じさせる実践に驚くしかない。市民の多くが上演の日を楽しみに待つ感動的な舞台である。（写真1・2）

成功事例はわが国にもある。たとえば1992年に始まった大道芸ワールドカップin静岡などが好例だろう。駿府公園や青葉公園のほか、呉服町商店街、七間町通りなど都心の街路が会場として使用され、随所の交差点に上演のポイントが設定される。ふだんは見慣れた商店街が、期間を限って非日常な劇場に転じる光景が面白い。圧倒的な集客力をもって都心の活性化に貢献している点に加えて、市民ボランティアで構成された実行委員会が運営している点も注目に値する。ワールドチャンピオンの審査も、街中を歩きまわるクラウンも、各ポイントでの司会も一般市民が務める。スタッフを含め市民がこのイベントを楽しんでいる雰囲気が、来街者にもひしひしと伝わってきて好感がもてる。市民と行政の協力のもと、わずかな期間に静岡市民のあいだで定着、世界有数のパフォーミングアートの祭典に育てあげた。その経緯が素晴らしい。（写真3～5）

写真1・2：ルアーブルにおける市街地での巨大人形芝居（筆者撮影）

写真3～5：大道芸ワールドカップin静岡の風景（筆者撮影）

イベントが喚起する「都市への想い」

現代において「イベント」といった場合には、運動会や文化祭などの学校行事、花見や誕生日などの個人的な行事、高校野球に代表されるスポーツイベント、オリンピックや万国博覧会などの国家的な行事を指すのが一般的だろうか。あるいは見本市、コンベンション、バザー、フリーマーケットなどを想起する人も多いだろう。しかしその多くは、公民館や劇場、あるいは公園のなかなどで行われ、市街地全体に展開するといった意識は薄いのではないか。

たとえば欧州の諸都市には、市内随所に「広場」という都市装置がある。祝祭がある日に限らず、音楽家や大道芸人がまちかどでパフォーマンスを繰り広げるのが日常の風景だ。歩行者を優先する街路も、パレードをはじめとして、市民が主催するイベントの場として認知されてきた。しかしわが国では、街路や駅前広場などの公共空間は、あくまでも交通空間として管理されており制約が多い。だからこそ、市街地を魅力的なイベント空間に転じる機会が重要になる。

イベント会場にあって高揚感とともに時間と空間を共有した人たちは、自己と帰属集団との関係を再確認することになる。だとすれば身慣れたまちかどでのイベント展開は、私たち市民のひとりひとりが、都市と自身と関係性を確認する好機と考えて良いのではないか。まちかどのイベントをさかんにすることで、市民の都市への意識を改め、ひいては愛着を高めることが可能になるはずだ。

はしづめ しんや

1960年大阪市生まれ。京都大学工学部建築学科卒業、大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。大阪市立大学都市研究プラザ特任教授。（財）大阪観光コンベンション協会アドバイザー、上海世界博覧会大阪出展プロデューサー他兼務。『倶楽部と日本人』『大阪モダン』『集客都市』『日本の博覧会』ほか著書多数。ディスプレイデザイン研究大賞、エネルギーフォーラム賞優秀賞など受賞。

特集 まちかどイベント

まとめ

“まちかどイベント”都市の創出

(財)福岡アジア都市研究所 理事長　樗木 武

まちかどのイベントとは

“まちかど”に明確な定義はない。“まちかどのうわさ”はまちのこぼれ話である。“まちかどの散策”はまち歩きである。つまり、まちのあちこち、市民のふれあいや暮らしの場という意味合いで、私達は“まちかど”という言葉を用いている。

一方、“イベント”も特に厳格に内容を規定するものではない。個人的な趣味や芸の類から、多くの人々が協働して行う催しや祭りまでと実に多種多様である。

福岡のまちでは、最近になり、そのまちかどで、さまざまなイベントが行われるようになった。従来からの伝統的な祭りや行事に加えて、オープンな音楽や演劇、ダンス、まち巡り、展示会、フリーマーケット、人と人との交流、景観の演出などである。

こうしたまちかどのイベントを、あえて特徴づければ、それは、演ずる、観るにしても、市民一人一人が自由かつ気ままに参加することである。また、その多くが継承よりもどちらかといえば創造することに意欲的である。さらに、互いに楽しむという性格でもある。

そして、そのねらいは何かと問えば、ミュージックシティ天神の6項目をはじめ、本特集それぞれの記事での記述が該当する。これらを突き詰めれば、まちかどのイベントの目的はまちのにぎわいの創出と市民相互の絆の形成であるといえよう。

従来のイベント、現代のイベント

ところで、まちかどのイベントは何も今に始まるものではない。従来から、信仰、暦の上の出来事、大きな事件、仕事、暮らしなどにかこつけて人々はさまざまなイベントを創出し、積み重ね、継承してきた。しかし、この従来のイベントと現代のそれには性格の上で違いがある。

従来のものは、どちらかといえば自然が織りなすリズムと関係して、暮らしの中の重要な出来事などに由来するものが多い。その意味では、従来のイベントはこれを取り行う必然性、伝承する重要性があり、その内容も厳格な秩序や手順にもとづいている。

これに対し、現代のイベントは、まちのにぎわい、市民の楽しみとふれあいを内容にするものが多い。場合によっては、イベント産業の育成やまちの活性化をめざすものもある。

あるいは、従来から受け継がれるイベントは、時の経過の中で洗練されて現代に継承され、文化的資質を向上させたものである。これに対し現代のイベントは、混沌とする中で多様に展開され、稚拙ではあっても創造性豊かなものとみることができる。

従来のイベントの展開・継承から文化への轍を踏めば、現代のイベントも、混沌とする中で回を重ねながら、創出され蓄積されて質を高め、新たな都市の文化へと昇華するものである。このことから、まちかどのイベントを積極的に推進することは、都市の文化を豊かにし、都市の質を高める所以となる。

まちかどの創出と活用を

都市は、まずは暮らしと産業活動のための都市基盤の整備、次いで高度の経済発展を主にして様々な施策を展開してきた。その上で、これらに続いて求められものは何か。それが現代に問われるものであり、都市の文化である。

しかし、都市の文化は筋書きや押しつけの中で生れるものではない。渦巻く混沌の中で、個性豊かな市民が、自由に創出するイベントを積み重ねる中から、市民自身が価値を見出すことで生み出されるものである。その意味で、都市の文化を育み、豊かなにぎわいの都市をつくることは、イベントを彷彿と湧きだすことができる“まちかど”を創出し、その活性化を図ることにあり、より一層促進すべきことであると考える。

博多駅地区社会実験「はかたんウォーク」報告

通りににぎわいを創出し、歩行者に歩きやすい空間を

(財)福岡アジア都市研究所 研究主査　兼子 慎一郎

平成20年10月4日(土)～26日(日)、博多駅地区で博多まちづくり推進協議会・行政・自治協議会などで構成される博多駅地区社会実験実行委員会により、社会実験(注)「はかたんウォーク」が実施された。この社会実験は、平成23年の九州新幹線全線開業を控え、博多駅地区の今後のまちづくりを考えていく事を目的としている。博多駅地区の現状の課題と目指すべき将来像を交え、博多駅地区社会実験「はかたんウォーク」の成果報告をレポートする。

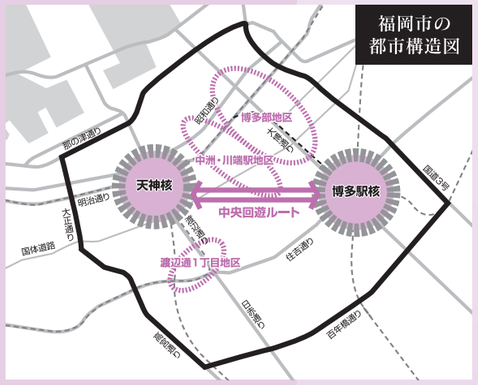
博多駅地区の現状と課題

博多駅地区は昭和32～53年度に実施された「土地区画整理事業」によって都市基盤、交通インフラが整備された。博多駅地区は博多港や福岡空港も近いといった事から、オフィスビルが集積するビジネス街として成長してきた。平日はビジネスマンを中心に賑わう反面、休日は人通りが少なく、閑散とした状況となっている。また、平日の朝夕の通勤時間帯を中心に、歩道部分で歩行者と自転車が混在し危険であり、自転車放置禁止区域に指定されているにもかかわらず、違法駐輪が至る所で見られるといった問題が見受けられる。

博多駅地区のにぎわい形成の必要性

平成18年6月の「新・福岡都心構想」(福岡市)は、九州・アジアの新しい交流時代を迎える中で、広域的に人を惹きつけ、訪れる人、住む人、働く人にとって快適で生活しやすく、事業者にとっても活動しやすい都心であり続けるためのまちづくりの目標に関して提言を行ったものである。

福岡市の現在の中核的地区は、「天神地区」・「博多駅地区」・「中洲・川端駅地区」・「博多部地区」・「渡辺通1丁目地区」の5つの拠点から成り立つ。特に、「天神地区」と「博多駅地区」を2つの核とし、その連携を強化し、歩行者が回遊するルート「中央回遊軸」を形成し、沿道機能の連続性やゆとりスペース確保に加えて、魅力的な景観の形成を図っていく事を目指している。



博多駅地区におけるまちづくり団体の設立

九州新幹線全線開業、新博多駅ビルの開業といった大きなまちの転換期を迎え、駅周辺をより快適で生活しやすく、訪れる人にとっても楽しく回遊しやすいまちになることを目的とした「博多駅地区まちづくり推進組織準備会」が設立(平成19年4月)。その翌年4月、参加会員を大きく増やし、「博多まちづくり推進協議会」が発足した。博多まちづくり推進協議会は、博多駅地区を中心とした企業・団体・自治協議会など120会員からなり(平成20年10月31日現在)、まちづくりガイドラインの作成・博多駅地区の清掃活動・冬期イルミネーション等の活動を行っている。

博多まちづくり推進協議会

(注)社会実験とは?
まちづくり計画、まちの運営や経営施策などにおいて、新たな施策の展開、技術の導入などを図る際、
①社会的影響が大きく、慎重な配慮が必要なもの
②効果が必ずしも十分に予測できないもの
③ある一面では効果があるが、他面で見れば問題発生の恐れがあるもの等について
期限や場所を限定して、実験的に実施を試み、その結果を評価して施策導入の是非や改善策などを検討するものです。

博多駅地区社会実験の実施に至るまで

博多まちづくり推進協議会の今年度の大きな活動のひとつとして、社会実験が挙げられる。前身の「博多駅地区まちづくり推進組織準備会」の事業部会の一つ事業部会プランニングチームのメンバーが検討を進め、博多まちづくり推進協議会のコアメンバーが社会実験に向けて検討を進めてきた。

博多駅地区のにぎわいを生み出すため、また博多駅とキャナルシティ博多を結ぶ「はかた駅前通り」の両側1車線を自動車空間から歩行者優先の空間へと変え、車線制限を実施して問題がないかを検討した。自動車交通量調査の解析と車線制限時の影響シミュレーションの結果を踏まえたうえで、それほどの問題が無いという結論に至ったため、博多駅地区社会実験の実施に向けて準備する事になった。

「はかたんウォーク」実施の3つのコンセプト及びそのメニュー

先で述べた博多駅地区の現状の課題を踏まえ、博多駅地区と天神地区を結ぶ「にぎわい回遊軸」を形成し、博多駅地区を含めた歩行者回遊性を高めると共に、歩行者と自転車が安心して通行できる道路空間を確保することを社会実験の目的とし、大きな3つのコンセプトを定めた。コンセプト別にメニューを紹介する。

1 通りに「わかりやすさ」と「にぎわい」

博多駅地区は街区が複雑であり、地下通路も多いことから、駅を利用した来街者にとって分かりにくい。人の流れを導く、ホスピタリティの高い誘導が必要であるため、通りにわかりやすい案内表示を充実させ、にぎわいを創出する。

通り名付けとまち案内

博多駅地区の11の通りに名称をつけ、主な交差点に案内サインを設けることにより、来街者にとってわかりやすい地区にするとともに、地域の人々に愛着のある道路となることを目的としている。

博多駅地区11の通りに名称を付け、まち案内サインを整備

オープンカフェ

オープンカフェの設置が博多駅地区の通りのにぎわいを創出する。飲食店前の舗道上にテイクアウトスペースとしてテーブルセットを設置する。

フラワーコーナー

はかた駅前通りの博多口側のコーナー部に花いっぱいのフラワーポットを設置。景観の向上につながり、人が歩きたくなるような通りとすることを目的とする。

回遊パフォーマー

はかた駅前通りでストリートパフォーマンスを実施することで、非日常としての道路空間を来街者が楽しみ、にぎわい、回遊性を向上させることを目的とする。

西日本シティ銀行本店の公開空地を利用し、ストリートパフォーマンス

キャンドルイベント

ろうそくの炎のように揺らぐたくさんのLEDキャンドルをはかた駅前通り沿に設置。博多部の御供所ライトアップウォークと連携イベント。歩く楽しみを創出し、回遊性の向上を図る。

博多ハロウィンパレード

約600名の参加者が自由なテーマで仮装して、博多駅前～キャナルシティ博多～博多リバレイン間をパレードする。はかた駅前通りに来街者を誘引し、にぎわいの創出と回遊性の向上を図る。

はかた駅前通りをおよそ600名がハロウィンの仮装をし、パレード

ストリートバナー

はかた駅前通りに並ぶ水銀灯に、バナーを設置することで通りににぎわいを演出。また、まちづくり財源として公共スペースでの広告展開の可能性を計る。

お休みどころ

沿道ビルのエントランススペースなどに、一休みできるテーブルセットを設置。通りを歩きやすくし、また通りの滞留時間を延ばし、にぎわいの創出を図る。

2 通りに「歩きやすい」空間を

近年、歩行者と自転車による交通事故発生件数は増加傾向。はかた駅前通りは歩行者と自転車が混在しているため、歩行者と自転車が安心して通行できる空間の確保を試みる。

歩行者・自転車の分離

お子さんからお年寄りまで、ゆっくりと安心して歩けるように、歩行者と自転車を分離。相互に安全に安心して通行できる道路空間を創出する。

はかた駅前通りにて、歩行者空間と自転車空間を分離

第2タクシープール

博多駅筑紫口付近は、客まちのタクシーで慢性的な渋滞になっている。車道や交差点付近で待機するタクシーを近隣のスペースに集約し、渋滞や事故の防止を図る。

3 環境と健康にやさしい移動手段の提供

近年の地球温暖化に伴い環境問題への意識や健康への関心が高まっている。

博多駅地区は慢性的に交通渋滞が発生しており、地区全体で環境問題に取り組む必要がある事から、環境と健康にやさしい移動手段の提供を試みる。

レンタサイクル

博多駅地区周辺には、櫛田神社をはじめとする観光資源や商業施設が点在。徒歩とバスなどの公共交通機関の中間的な移動手段として、来街者の移動支援を行う。

自転車タクシー

博多駅地区の回遊性を高めていくため、道路空間の見直しとあわせ、多様な交通手段の提供による交通サービスの向上が必要。観光気分を味わえる移動手段を提供する。

ベロタクシーでいつもと違う博多を体感

おしチャリゾーン啓発

博多駅前広場は歩行者が多く、自転車に乗車したままの通行は危険なことから、壁面におしチャリステッカーを貼り、自転車を押して通行してもらえるよう啓発する。

公共交通利用促進

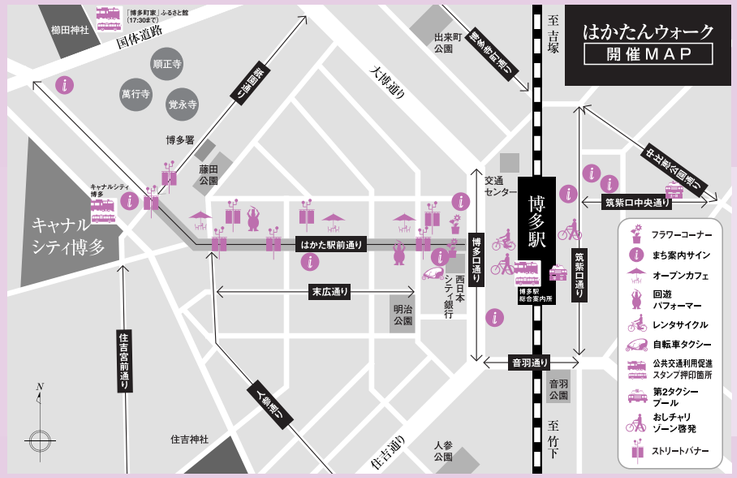
公共交通機関（福岡市営地下鉄・西鉄・JR）の復路の乗車券類をお持ちの方に、抽選で賞品（公共交通機関のプリペイドカード）をプレゼント。公共交通機関の利用促進を図り、博多駅地区への自動車交通の過度な集中を減らし、当地区の交通円滑化を図る。

「はかたんウォーク」を終えて

10月25日（土）・26日（日）に、はかた駅前通りに自転車走行スペースを設置し、車道部分を4車線から2車線へと減少させたが、はかた駅前通りに大きな影響を及ぼさなかった（グラフ1参照、調査箇所は右地図参照。）

また、自転車走行スペースを設けた25日には、はかた駅前通りに、はかた駅前通りをハロウィンの仮装行列パレードや、通り沿いにLEDライトを並べるライトアップを行うなどした。また、両日は回遊パフォーマーがはかた駅前通りの公開空地を利用してストリートパフォーマンスを行い、はかた駅前通りを歩くための憩いの場としてのオープンカフェ・お休みどころを設置。その結果、はかた駅前通りを通行する自転車量も歩行者量も増加した（グラフ2参照）。

今回の社会実験「はかたんウォーク」で、25・26日の両日に博多駅地区を訪れた人にヒアリング調査を行った。一部のメニューについては課題が残った（通り名付けとまち案内サインの設置については、およそ9割の方が案内板の存在に気づかなかった）が、「博多駅地区がもっと人で賑わってほしい」、「継続的に社会実験を実施して欲しい」、「今度は平日に自転車走行スペースを設けて欲しい」といった意見が多く、概ね実験に対し肯定的であった。

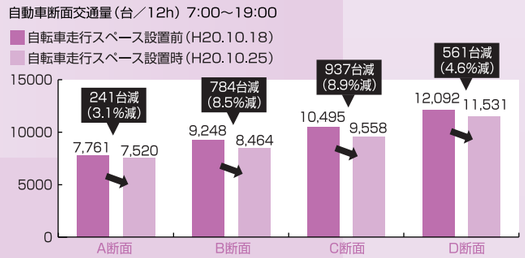


平成23年の九州新幹線全線開業に向けて

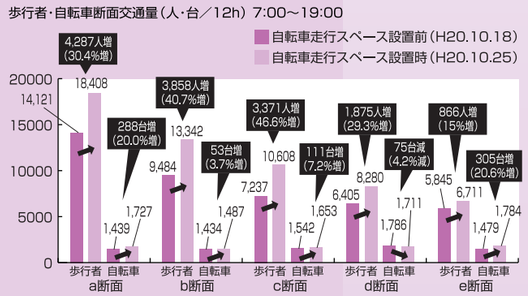
今回の博多駅地区社会実験「はかたんウォーク」を実施した事で、人々が自分たちの“まち”について考えるきっかけになったように思える。まちづくりは、一朝一夕では成り立たず、継続的な取り組みが必要である。

博多駅地区は、平成23年に大きな転機を迎える。その時に向けて、気運を盛り上げていくためにも、今回の博多駅地区ににぎわいを演出するメニューを中心に、実施していく事が必要ではないか。それと並行して、博多駅地区に住む人・働く人・訪れる人が自分たちの過ごすまちに関してもっと積極的に考えるようになり、それぞれの出来る範囲でのまちづくり活動に参画する事が必要であると考える。

●グラフ1：自動車交通量調査結果



●グラフ2：歩行者・自転車通行量調査結果



●交通実態調査箇所位置図

※10月25日（土）・26日（日）は、はかた駅前通り（博多口～博多署入口）を10時～19時まで車線規制を実施

(財)福岡アジア都市研究所 設立20周年記念シンポジウム

～東アジアのダイナミズムと地域交流拠点都市の新たな可能性を求めて～

Fukuoka
Asian Urban
Research Center
SEMINAR

■基調講演
吉田　宏（福岡市長）

■パネルディスカッション
コーディネーター
立石 楊志（西南学院大学商学部教授）
パネリスト
出水　薫（九州大学大学院法学研究院教授、九州大学韓国研究センター教授）
琴　性根（釜山発展研究院先任研究委員）
王　志剛（中国人民大学農業・農村発展学院助教授）　※所属・役職はセミナー当時のものです。

2008年7月31日（木）13:30～17:00
福岡市役所 15階講堂

「福岡市のまちづくりへの寄与」と「アジア地域への協力・貢献」を観点に都市政策の調査研究を行う福岡市が出資する研究機関である(財)福岡アジア研究所の20周年を記念したシンポジウムが開催された。
基調講演では、吉田市長に、経済のグローバル化が進む中、福岡市のアジアに対する取り組みをお話いただき、パネルディスカッションでは、かつて福岡市に留学等で滞在の経験があり、母国に戻って第一線でご活躍中の研究者の方々より福岡への思い入れ、母国に戻り改めて感じる福岡の印象などを語っていただいた。

基調講演

「アジアに対する取り組みと今後」

福岡市は、中世から広く「アジア」に向けて開かれたまちであり、当時日本で最も国際化された都市であったということは間違いないのではないかと思います。今でも地名に残っていますが、中世には九州各地にたくさん唐人町があり、九州北部を中心に盛んに交易を行っていました。その最大のものが博多の唐人町で、私たちの祖先は海にどんどん出て行ってアジアとの交易でこの地域を栄えさせた。そのような歴史的な背景を持っているこの福岡を通って大陸の文明、文化が伝播していきました。私たちは非常に誇らしい歴史を持っているのです。

福岡市が「アジア」というものを意識してまちづくりを行うことになったのは、1987(昭和62)年です。基本構想を策定し、都市像として初めて「アジア」、「活力あるアジアの拠点都市」を掲げたのが始まりではないかと思います。1989(平成元)年にはアジア太平洋博覧会（「よかトピア」）を開催しました。戦後ずっと蓄えてきたエネルギーがまさに花開く、高度成長を経てもう一段次のレベルに行こうと、福岡市が熱気に溢れたまちづくりをスタートさせた頃です。高い志を立ててやってきたおかげで、現在の福岡の発展があり、更に「アジアの拠点都市」・「中核都市」となるべくもっと磨いていかなければならない、まさにアジアの時代だと感じています。

指定都市市長会議(17政令指定都市の市長が集まる会議)で、市長さん方が口々におっしゃるのは、外国の都市と直接国際的な関係を結び国際戦略を立てていかないとまちの発展はないということです。福岡市は、2008(平成20)年6月に「政策推進プラン」(「福岡市　新・基本計画」の第2次実施計画)を策定しました。九州の中核都市として更に発展するために「アジア」を中心とした国際戦略が必要で、これは今後4年間のまちづくりの目標の中で、アジアに関しては大きく二点掲げています。一つは積極的なシティプロモーションを行うこと、もう一つは新たな交流拠点、アジア新時代における交流拠点都市を作ることです。一点目の積極的なシティプロモーションとは、商業都市で、九州観光の入り口でもある福岡に企業活動も含めてアジアからより多くの方に来ていただき福岡を活性化するというものです。例えば去年、福岡・釜山の両市長が一緒に大連に赴き、観光プロモーションを行いました。大連は中国の東北地方の入り口ですので、冬の間は暖かい釜山や九州に来てくださいと。また、天津や上海から発着する大型クルーズ船を誘致しており、第一年目の今年は中国から計22回博多港に寄港し、約3万人の方がお見えになる予定です。中国の銀聯（ぎんれん）カードを福岡のショッピングエリアで使い、おみやげを買えるようにしています。イギリスの雑誌に福岡市は世界で最もショッピングがしやすいまちとお墨付きをいただき、住みやすさでは17番目と評価されました。そのような国際的な評価も定着しており、実際に他所から来た人達がショッピングを中心に福岡の滞在を非常に楽しんでいるので、さらに集客に力を入れたいと思っています。二点目の交流拠点都市づくりとは、具体的には博多港・福岡空港を中心とする物流拠点、学術を基にした交流拠点、韓国特に釜山との連携です。まず物流拠点ですが、この10年で博多港が扱うコンテナ量は倍になりました。こんなに伸びている港は日本中どこにもありません。福岡の全人口の約40%が何らかの形で港に関係して暮らしを営んでおり、港の役割は大変大きいのです。港の機能強化はアジアの物流拠点としてのレベルアップを意味するので、しっかりと行っていきます。学術交流拠点に関しては、IT・生化学やベンチャー企業など知識集約型の産業を興し、しかもアジアとの繋がりの中で交流拠点都市をつくっていく。学術の交流拠点としての役割が大きい福岡市内の大学とも密接に連携していきます。この春には九大の伊都キャンパスそばに福岡市産学連携交流センターをオープンし、アジアに向けた研究拠点としてやっていこうと、多くの企業に入っていただき、もう満杯で、二番目のセンターが必要ではないかという勢いです。さて、釜山との連携について、なぜ釜山かといいますと、アジアは広大で全部の地域や都市と全方位でやっていくには経済的な資源も不足しがちなので、お隣同士の釜山と福岡でどこまで国境を溶かした形で地域の連携がやれるかというチャレンジをしているところです。釜山市長と何度もお会いしてかなり親密になっています。日韓の政府間で起きている竹島問題は心配ですが、国同士の課題はソウルと東京でやっていただき、釜山と福岡はそれぞれの地域の拠点都市として、仲間・兄弟としてやっていけるのではないか。我々は東京より釜山に近く、釜山はソウルより福岡に近い、まさに一衣帯水の関係です。福岡・釜山間に海底トンネルを掘るという話は釜山では熱を帯びております。韓国は少し景気が悪く、経済界出身の李明博大統領が期待と共に登場し、釜山を中心とした韓国南部と福岡を中心とした九州との連携を韓国政府がバックアップしたいとのことです。どれだけ垣根のない経済圏が二都市を中心につくれるか、経済的分野・文化・教育などあらゆる分野で何が出来るかということを共同で調査していきます。福岡・釜山間に今までにない経済連携が出来るとすれば、この先アジア全体がEUとして一つの経済圏を成り立たせているヨーロッパのような、AUとなるのでしょうか、そのような日が来たら、最初に実行したのは福岡と釜山の関係だったねと言われるくらいの気持ちで一丸となって努力しています。

最後に文化関係ですが、皆さんよくご

存知の「アジアマンス」は来年でちょうど20年を迎え、この節目にもう少し整理してやっていこうと思っています。福岡市のアジア文化関連事業の中でも、例えば「福岡アジア美術館」は日本よりアジアなど国際的な評価が高く、今まで培ってきたアジアに対する視点というのは間違っていないと考えています。今後もこれまでの20年のあゆみをしっかりと続けて10年、20年先、さらにアジアと本当に融合したまち、福岡をつくっていきたい、皆さまの力をいただき福岡はアジアの国際都市、交流拠点都市を目指していきたいと思います。

パネルディスカッション

「アジアの研究者が語る福岡のシナリオ」

立石　本日ご出席の皆様は、福岡アジア都市研究所の母体のひとつアジア太平洋センター(APC)に縁があり、若手研究者活動助成を受けたりフェローとして滞在されたりしていらっしゃいます。まず、琴先生と王先生に以前滞在された当時と現在の福岡の対比そして今後の福岡への期待・提言を、出水先生にはこれから福岡が魅力ある都市になる方策についてお話をお願いします。

出水　吉田市長が国家の首都同士ではない関係が重要な時代とお話されました。私の専門の政治学の観点から言いますと、この200年から300年間の国づくりというのは国民国家、いわば日本人に日本政府があり東京を首都として日本社会が保証する枠組みがあるというものでした。昨年、由布市でまちづくりの調査をした際に大変印象に残ったのは、まちづくりの単位・サイズとは自治体とイコールではないと

若い女性市議の方が発言されたことです。地域政府である自治体、その政府の領域が一つの単位として考えられ何事かが起こっていく時代が終焉しつつあることだと思いました。アントニオ・ネグリ氏とマイケル・ハート氏の共著『帝国』や田中明彦先生(東京大学東洋文化研究所教授)の『新しい中世』に書かれていますが、国という単位がゆるくなり都市対都市あるいは自治体や企業やNPOなど様々なネットワークがものをいう時代になってきているということなのです。福岡のまちづくり戦略もその文脈から考える必要があります。また、五味文彦先生(東京大学名誉教授)は『全集日本の歴史第5巻　躍動する中世/新視点中世史』に、人工的に作られた京都・奈良・鎌倉のような政治都市や宗教都市ではなく、博多こそ近代以前における自然に生まれた都市の原型であると書いていらっしゃる。博多が一つの分岐点となり、東シナ海から人・物・船が行き来し瀬戸内海を通り大阪・京都に至る。つまり、中世の博多は様々な人々が行きかい海の向こうから珍しいものが来る「憧れの交差点」でした。これは単なる「物流」ではないのです。これは現在がどんな時代になっているかとも関連づけられますが、例えば、アップル社のiPodをご存知かと思います。この商品の利益は半導体や回路を作っているところではなく、アイデアやデザインに集中しています。つまりアイデア・デザインといったものが人々の喜びや価値を満たし利益を生み出しているという象徴的な商品です。ドラッカーが定義した「知識資本主義」やドイツの社会学者ベックの「労働なき資本主義」の指摘のように、ハード(物づくり)よりもソフト(アイデア)、もっと言ってしまうと文化が経済的価値を生み出す源になっている。文化が豊かになるためにも「憧れの交差点」が必要で、これからの福岡がそうなりうるのです。私は文化を発展させるためには魅力ある人間が集まる場所を作ることが必要だと考えます。そのため外国から来た多くの人が暮らし、常に多様性の交わりから新しいものを生み出していくことが重要です。多様な文化を受け入れるまちとは、外から来た人に対する制約を取り除き、元からの住民も住みよいものです。

琴　1991年と昨年、福岡に滞在し、この間に感じたのは、人・高層ビル・車や韓国語・中国語が増加したこと、残念ながら空気が以前より悪くなったことです。福岡は住みやすいまち、ショッピングがしやすく天神から徒歩30分内に都市機能が集中したコンパクトシティです。東アジアの地域交流拠点都市としての福岡を考える場合にベースとして多文化を受け入れる雰囲気が必要だと思います。九州の窓口としての福岡の役割や可能性は大きく、もう少しまちの象徴性を高めたらよいのではないでしょうか。可能性としては、若者が多いまちなので東アジアへ向けた若者文化の発信地、特に日本とアジアをミックスしたファッション。次にスポーツやイベントの拠点都市、また大学が多いので人材育成の拠点都市、今世界は英語中心のグローバル化が進んでいますので、英語と日本語が出来る東アジアで活躍できる人材を育てるということが肝要ではないでしょうか。また福岡ベンチャーマーケットがありますし、東アジアのベンチャー拠点都市・福岡も考えられます。最後に、先ほどの出水先生の「憧れの交差点」ではないですが、韓国の昔の言葉で「香港へ行く」というのは「気持ちは極めていい状態に至る」という意味です。「福岡へ行く」という言葉が出るような、福岡が東アジアの人々の憧れの都市になることを期待しています。

立石　ここまでのお話で、いくつか共通することが挙げられていますね。福岡の多様性と象徴性の調和、しかももう少し象徴性、ブランド化というのかもしれませんね、を高めると。福岡は何でもあるけれども、これといったものがないというところがありますからね。

王　私の福岡の印象は、人が温かい、まちがきれい、物価が高い、住みやすいということです。福岡を活性化させるために、アジアとの貿易・投資は無視できません。私の専門である農業経済の視点から言いますと、日本は中国の大市場を見逃してはなりません。福岡は農産品の中国への販売、企業進出も考えるべきです。例えば私の故郷遼寧省開原市では、外資と内資を積極的に誘致しており、税金の優遇もありますので是非ご投資ください、と宣伝させていただきます。また、福岡にとって4つの力が必要だと思います。活力(経済的な技術)、文化力(伝統と歴史)、魅力(環境)、情報力。中国では福岡の知名度があまり高くありませんので、情報の受発信は非常に重要です。

立石　最後の点、情報の発信は重要ですね。福岡は縁のある方はよくご存知ですが、外国に行くとまだマイナーだと感じます。皆様のお話を、福岡アジア都市研究所は人材育成で成果があがっているなとうれしく伺っているところですが、次に、住みやすいまちとしての評価が高い福岡は果たしてそうなのか、ご意見をいただきたいと思います。

出水　一過性、旅行に来てショッピングがしやすいかとか、まちなかを歩いて回遊できるかという評価は重要かもしれませんが、異なる背景を持った人々が出会い新しいものが生まれてくることを期待する、外から来た人が暮らすという観点からは、改善の余地があると思います。例えば、残念ながら留学生が必ずしも福岡の生活をいい思い出として帰国しているわけではありません。私は釜山で3年間暮らして愛着がありますが、実際に住んだ人がその感情を育み他の人に語り、自然に広がって文化を醸し出すという点は重要だと思っています。

琴　住みやすさには、生活・仕事・レジャーの調和が必要です。趣味の写真撮影でまちをよく歩きましたが、福岡は住みよいまちだと思いました。ただ、改善の余地としては夜中にバイクや車の騒音が多いことや中洲あたりに散らかっているゴミは気になりました。観光客も多く訪れますのでもっときれいにしたら印象が良くなるのではないでしょうか。最近は通り魔など事件が多いので、安全面にもっと気を配る必要があると思います。

王　住みやすい良いまちですが、物価は少し高いと思います。

立石　人が親切で住みやすいと温かい言葉を頂きましたが、日本人はとりあえず親切ですが本当に親切という段階には中々いかないと聞きます。やはり、精神的な鎖国、もっと昔の方が国際人で最近はそうでないという指摘がありますね。では次に、大学・留学生の活用について具体的な提言をいただけませんか。

出水　福岡を他の都市と比較すると、大学が多いという特徴があります。今は各大学が留学生の受け入れを増やしているので、人数は増えているはずですが留学生と地元の人が交流する場がどこまで拡大しているか疑問です。もちろん福岡市は色々な場面で仕掛けを作っていますが、一過性というかお祭りの盛り上がりに留まっているのではないかという側面がありますね。少しずつ広がっている小さな取り組みがあることを否定はしませんが。生活していく上で起こる問題は自治体に関係することが多いのですが、自治体だけにまかせるのではなく、身近な市民が自治体と留学生の間に入っていくネットワークを作ることがソフト面では重要だと思います。具体的な例としては、福岡の都市部の一部は空洞化により空き店舗・スペースが生まれ、また小学校の統廃合なども行わざるをえない地区もあります。財政改革の必要性が言われていますが、行政施設の統合ではなく、既存の施設を高齢者ケアの場・学童保育などと外国人留学生の宿舎を併設するのはどうでしょうか。ハードとして空間的な仕組みを作ることにより、留学生と日常的に接触するといった市民の経験といったソフト面が蓄積されるという結果が生まれるのではないでしょうか。

琴　韓国では、最近日本への留学を避けるようになってきていると思います。留学後、よい就職をすることが大きな目的ですが、韓国での就職には英語が重要になっていますし、日本国内での就職が厳しいのでメリットが少ないのです。留学後、日本で仕事を経験する場がもっとあったらと思います。

王　私が留学していた時、ちょうどアジア通貨危機が起こり、日本政府はアジアの留学生に一時金を給付したのですが、中国人留学生にはなかったんです。差別ではないかと思いましたね。中国の学生に福岡の大学への留学を勧めていますが、大学の世界的なレベルが高くないためあまり人気がありません。中国人は人が多いのが都市だという意識があるので、人を増やす、福岡のイメージのアピール方法を考える、大学のレベルを上げることが重要だと思います。

立石　では、最後に少子高齢化社会の到来、現在の車社会は変化するべきなのかを含めて、今後福岡がどのようなまちになったらよいとお考えでしょうか。

出水　一点目は、資源の制約つまり化石燃料を大量に使う時代が終焉に向かい、先ほどの国際都市・中世博多にもう一度チャンスがやって来ると思います。つまり福岡の自然的な地理的な条件ー東シナ海や黄海・瀬戸内海といったラインの交差点で海という低コストで物流を行うことが可能ーが有利になるのです。二点目は、高齢化との関連で、大量の燃料を用いずに人々が徒歩や自転車などで移動できる範囲内の重要性が増していると言えます。人との対面の面白さを発見できる場になり、ひいては文化を醸し出すことだと。今日は

文化を強調してお話しているのですが、文化の根っこは暮らしやすさだと思います。暮らしやすい場所で無理せず暮らそうと人が集まってくる場所に多様性の保証がある。これからの福岡はいろんな条件の人が淡々と暮らせるまちづくりを目指してはどうでしょうか。結果として、多くの人をひきつける力が生まれるのではないかという気がしています。

琴　大気汚染や駐車場問題もありますから、自動車問題は検討する必要があると思います。また、通りで例えば音楽を演奏するといった文化の発信がもっとあったらと思います。日本的なものだったらチンドン屋などに外国人は興味を持つと思いますし、大名で若者文化をもっと発信できるのでは。

王　日本にはエネルギー不足を解決する技術開発と環境問題先進国としての環境保護を期待しています。中国では自転車通勤キャンペーンをしている地域がありますので、福岡でもぜひ取り入れていただきたいと思います。

立石　環境問題対策に関して、外国は先進的な試みを行っているところが多いですね。また、後発性の優位者といいますか、中国は先進国を見て自分が同じような環境・公害問題を起こさないという気持ちを持つことが重要ですね。日本がガソリンエンジン型自動車の生産を続けるのはどうだろうかと素人ながら感じます。自動車問題は研究所が研究報告することができると面白いと思います。最後に、福岡もアジアに一番近い都市という地理的な特徴だけでは語れない時代になったということだけは、お心に留めていただきたい。これから福岡市はどうするか自分の問題として考えていただきたいと思います。

データで見る福岡市 vol.6

Data of Fukuoka city

（財）福岡アジア都市研究所 研究員　岩屋 京子

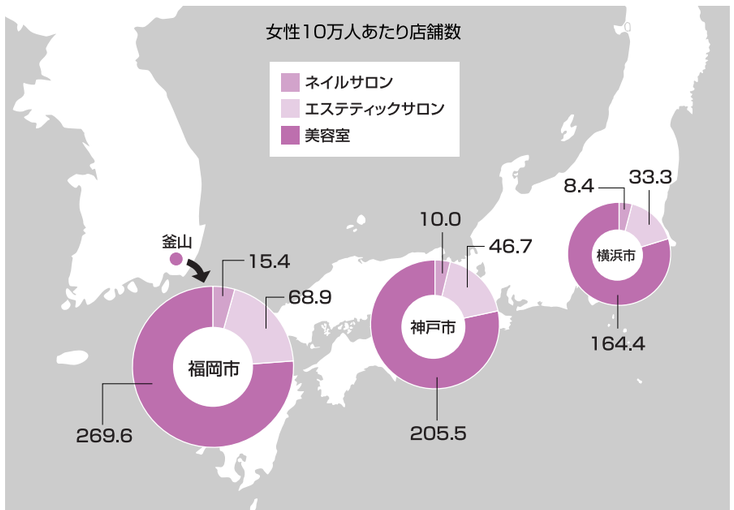
このコーナーでは、福岡市にまつわる様々なデータをもとに、福岡市の現在の姿をご紹介します。

「福岡の女性はきれい」・・・よく耳にする言葉です。女性が元気なまちは元気なまち。今回は「美しい女性が多い福岡のマーケットとビジネスチャンス」にスポットをあててデータを紐解いてみます。各分野でご活躍中の皆さんのコメントと共にご紹介します。

ビューティ3都市物語

福岡のまちを歩くと、美容室、ネイルサロン、エステティックサロンを数多く目にします。天神のファッションビルのなかには、こうしたサロンばかりを集めたフロアを設けているところもあります。女性のキレイを支えるスポットが多く、ビューティ産業が盛んなことは福岡の大きな特徴の一つです。ファッション雑誌では東西おしゃれ対決の定番の横浜と神戸。この二つの都市と福岡を比較してみました。女性の人口に対するサロンの数は、三都市で福岡が断トツです（図1・図2）。この数字を見た「モテ髪師」義永大悟さんも「福岡には美容室が多いことは知っていましたが、これほどの数字だったとは」と驚きの声を上げていました。

●図1：女性人口に対するサロン数の比較



福岡できれいになろう!

「釜山から毎月福岡のカリスマ美容師のところへ通う女性がいる」との事実（注1）も既に紹介されていますが、こうした海外からの福岡リピーター予備軍を思わせるエピソードがあります。韓国人向け九州の観光サイト「九州路」の作成に携わる帆足千恵さんは、西通り（福岡市中央区）を歩いていて韓国からの旅行者にこう声をかけられました。「友達に会う前にこの辺りで髪を切りたいので、良い美容室を教えてもらえませんか。」そして実際に近くの美容室に案内して大変喜ばれたそうです。韓国人旅行者が福岡でファッションや買い物を楽しみ、更には福岡の美容サービスを求めるケースが徐々に増えています。「福岡に来ればセンス良くきれいになれる」との評判が広まり、今後ますます海外から多くの人が福岡に足を運んでおしゃれを楽しむようになるでしょう。

素敵に美しく暮らす

このようにビューティ・サービスが充実している福岡市ですが、自分を包む洋服や日々の暮らしを美しく彩る花など、おしゃれに美しく暮らす為のモノにかける女性のお金の使い方はどうでしょう。三都市の家計調査を比べてみました（図3）。

福岡市は全体的に全国平均をかなり上回っており、三都市で比較しても一番です。ただ外見ばかりを重視しているのではなく、インナーなど見えない部分にも気を使っており、バランスの取れた美しさに対する意識が高いことが分かります。また、30歳前後の働く女性にお金の使い道を聞いたアンケート（注2）では、「将来お金をかけたいこと」はエステより「健康維持」と答えた人の割合が他都市に比べて高く、将来にわたって健やかに美しくありたいと考えているようです。

●図2：女性の数とサロンの数　福岡が断トツ!対横浜比で美容室は1.6倍、エステサロンは2倍以上

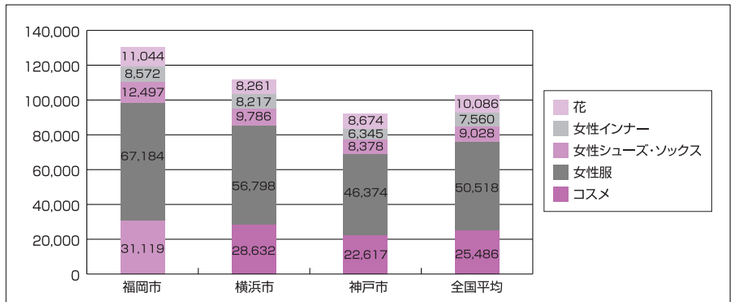
	横浜市	神戸市	福岡市
女性人口（H17国勢調査より）	1,776,049人	800,966人	728,182人
ネイルサロン	149	80	112
10万人当たり	8.4	10.0	15.4
エステティックサロン	591	374	502
10万人当たり	33.3	46.7	68.9
美容室	2,919	1,646	1,963
10万人当たり	164.4	205.5	269.6

「iタウンページ」ホームページにて検索。キーワードに「美容室」「ネイルサロン」「エステティックサロン」を指定、「福岡市」「神戸市」「横浜市」の各区ごとに検索。結果の総数から重複を除いた数。（2008.9.22～29調べ）

自分らしさの追求、その結果としての美しさ

好奇心が強くチャレンジ精神が旺盛なこと、外見にとらわれず本質を求める姿勢、内面とのバランスの取れた自分らしさを追求すること。「これらがバランス良くトータルで表れた結果としての美しさが備わっている」、福岡の女性がキレイと言われる所以はそんな女性が多いことにあるのではないでしょうか。福岡を拠点に女性を対象にしたビジネスで活躍中の4名のお話からもそんな福岡の女性の姿がうかがえます（下欄の各コメント参照）。

●図3：美しく暮らすための支出　見えないところにもお金をかけている



「家計調査年報　平成17年、18年、19年」総務省より作成（単位:円）。1世帯当たり年間の品目別総世帯支出額の3ヶ年平均値。
品目内訳は下記のとおり
・コスメ=化粧クリーム、化粧水、乳液、ファンデーション、口紅、他の化粧品　・女性インナー=婦人用ファンデーション、他の婦人用下着、婦人用寝巻き
・女性服=婦人用洋服（女子用学校制服を除く）、婦人用シャツ・セーター類　・花=切り花
・女性シューズ・ソックス=婦人靴、婦人用ストッキング、婦人用ソックス

女性のキレイが福岡の魅力

福岡にこれだけ多くのビューティ産業が集積しているのはそれだけのマーケットが存在するからに他なりません。自分自身を客観的に知り、個性を活かすために納得できるプロのサービスを求める女性たち。そして厳しい競争の中でセンスとスキルを競い合うことでレベルを上げるプロのサービス。その質の高いサービスを求める女性を他の都市や海外からも、もっと惹き付けることが出来るのではないでしょうか。ショッピングの街世界一に福岡が選ばれた（注3）背景には、洗練された美意識とキレイに対する旺盛な消費意欲を持つこのような女性パワーがあったと言えるでしょう。福岡の国際戦略を研究する山下永子研究主査の言葉を借りると「女性がキレイはまちの大きな魅力の一つ、都市ブランディングの大きな要素と成り得る!」のです。

（注1）出典「福岡・釜山圏における日常交流圏体制づくりに関する研究　基礎調査報告書」（財）福岡アジア都市研究所、2007年
（注2）出典「2007年　全国シティリビングアンケート」サンケイリビング新聞社、2008年
（注3）出典「MONOCLE　issue15,vol.02 July/August2008」

（株）西日本リビング新聞社
シティリビング事業部
編集グループ主事 編集長
野尻 由香さん

福岡の女性は自分に似合う色や髪型をよく知っていると美容師さんから聞きますし、とても個性的だと会議の際、他の都市の編集長からも言われます。冷静に自分を見ることができて、何より素材を重視する傾向にあるようです。スキンケアに対する意識がとても高く本物の美しさを求めている・・・その姿勢が美容に関するお金の使い方にも現れているのでしょう。客観的に自分を見ることができるからか、福岡の読者の投稿文章は個性がよく表れていて面白く、自虐ネタが上手いんですよ。素材である自分自身を活かす術を知っているということですよね。また、九州発の石けんブランドが多い点も気になります。素肌美だけでなくエコにも関心が高い人が増えているのでしょう。

フィニッシングスクール
インフィニ 副校長
三浦 由加里さん

女性の笑顔が生き生きとするのは、自分らしさを上手に表現できているときだと実感しています。当校では一人一人の魅力を引き出すために、内面と外見をトータルでバランス良く磨いていくレッスンを行ってきました。20年以上で11,000名を超える修了生の8割は県内の10代～80代の方。福岡には年齢を重ねても自分磨きに関心の高い方が多いのですね。自分の知る素敵な女性が、実は当校の修了生と聞いて入学される方も多く、なりたい女性のロールモデルが身近にいることも多くの女性を刺激している要因かもしれません。福岡は都会的な空間もあり、自然も満喫できる、丁寧に毎日を暮らす余裕が持てる街だということも、女性の美しさの理由だと思われます。

株式会社 咲ら化粧品
代表取締役
森 咲子さん

福岡には「うわべだけでない本当の美しさ」を求めている女性が多いのではないでしょうか。当社商品も「無香料・無着色・パラベン無添加」「ヘチマ植物由来成分配合」「自分が使いたい高品質でこだわって作った」という内容を、新聞などで取り上げていただいた時、多くの反響を頂きました。それは、福岡の皆様がブランドや見た目だけではなく、「本当に品質が良いものを」という目線で自分で情報収集し、自分で試してみようという意識の高さによるものではないかと感じています。福岡で起業して全国区になった「石鹸洗顔で素肌美を引き出す」というコンセプトの化粧品メーカーや、通販の健康食品会社がご活躍だったりするのを見てもそう思います。

「モテ髪師」
美容室ピース
義永 大悟さん

他の都市から来た男性からは「福岡はカワイイ子が多いね」とよく言われます。福岡の女性はカワイイ・キレイと言った情報にはとても敏感です。好奇心が旺盛で新しい物事を珍しがってトライする人、前に出て行く女性が多いですよね。奇をてらうような奇抜さを求めるのではなく、髪の色もメイクも平均値が高いと言うか、全般的に「丁度良い」という女性の層が厚いです。そういった意味では保守的と言えます。ただ自分らしさとしての個性は、納得のいくものを求める方が多いですね。お客様のカウンセリングを通して実感しています。

アジア文化 ASIAN CULTURE

アジアポップミュージック事情 2

若者が目指すのは東京？アジア？

株式会社 九州国際エフエム
取締役 営業制作部長　坂田 隆史

チューリップ、甲斐バンド、井上陽水・・・70年代以降福岡は多くのミュージシャンを輩出して来た。その多くは一路東京をめざし、大手レコード会社からリリースすることで自らが全国区のミュージシャンになることを夢見て。現在は東京を経由せず、直接中国や東南アジアでの活動を目指すミュージシャンがここ福岡には数多く存在する。

福岡から東京へ

財津和夫を中心に結成され、福岡では絶大な人気を誇ったチューリップが1972年東芝レコード（当時）からデビュー、翌年リーダーの財津和夫の上京経験談的な歌詞の「心の旅」が大ヒット。一躍全国区の人気を獲得した。時を前後して井上陽水、甲斐バンドといった福岡出身のミュージシャンが大活躍していた時期から、全国区で活躍するには東京であり、独自の文化を持つ関西エリアからでさえ、多くのミュージシャンが東京を目指した。その後も福岡からは数多くのミュージシャンを輩出し、ビートルズの出身地であるイギリスのリバプールになぞらえて、日本のリバプールと呼ばれることもしばしばある。

また福岡に根ざし福岡を強く意識したバンドも多く存在した。サンハウス、ARB、ロッカーズ、The Mods・・・彼らのエネルギッシュなロックンロールは「めんたいロック」とも呼ばれた。サンハウスは解散後も福岡では伝説のバンドとなり、ギターの鮎川誠氏はSheena & The Rocketsを結成し現在も活躍、ほかのメンバーも幾度かの再結成を経ながら活動している。ARBの石橋凌氏、ロッカーズの陣内孝則氏は現在では俳優としての活動が中心となっている。The Modsは現在でも高い人気を誇り第一線で活動中である。

こうしたロックグループ以外にも福岡出身のアーティスト（タレント）は枚挙に暇がないほどである。タモリ、海援隊、松田聖子、The Checkers、Chage&Aska、浜崎あゆみ、etc.（福岡出身のミュージシャンについて詳しくはhttp://f.musicon.jp/を参照）など、東京のメジャーレーベルからリリースし現在でもトップクラスのアーティストが数多くいる。

福岡からアジアへ

しかし近年、音楽産業の中心は東京といった価値観にとらわれることなく、独自に活動のフィールドを広げているミュージシャンが見られるようになってきた。特にここ数年は、福岡県が行ってきたアジア若者文化交流事業のサポートもあり、アジア各都市での演奏活動やコンサートへの出演、またCDのリリースなど国境を越えて活動するミュージシャンが増えてきた。

久留米出身で現在は日本全国でライブを行う「The Travellers」はメジャーレーベルからリリースすることに固執せず、自分たち独自の音楽をライブ中心に伝えていくことで、今では全国区といっていい人気を獲得するにいたったバンドであるが、2004年、福岡県のアジア若者文化交流事業の一環でタイ・バンコクの音楽イベントの出演したところ（写真1）、タイでも人気があがり、その後バンコクでのCDレコーディング、リリース、ライブツアー、イベント出演などすっかりバンコクの人気バンドに成長した。

彼らの人気の秘密は、ジャイブと呼ばれるダンサブルな音楽で、ジャズをベースにしているところから音楽的な普遍性が国を問わず受け入れられたようである。

また、昨年夏、中国・北京で開催された北京ポップフェスティバル（今年は会場の朝陽公園が北京オリンピックの競技会場となり開催されなかった）に出演した「Doc Holiday & Apache Train」（写真2・3）は、福岡のライブハウスを中心に活動しているバンドであるが、自らをガレージロックと呼び、彼らの曲を知らなくても見るだけで楽しいステージを展開している。中国では、こうしてステージを演奏以外のパフォーマンスでエンタテインするバンドがなく、彼らのステージは人気となった。北京では2日間ステージに上がったが、2日目は前日彼らのステージを見た観客が友達を連れてきたという感じのグループも多く、大いに楽しんでいたのが印象的であった。彼らは、韓国釜山や上海、バンコクでも演奏しており、行く先々で人気を博したバンドである。

福岡県のアジア若者文化交流事業は、2004年から3年間私が事業プロデュースに携わっていたこともあり音楽に関しては福岡のバンドをアジア各都市で開催されたイベントに派遣した。最も大きな規模のイベントはタイ・バンコクで毎年11月に開催されている「ファットフェスティバル」（主催：ファットラジオ）である（写真4～6）。初めてこのイベントに派遣を果たしたときは2日間で来場者が40万人を越えるにもかかわらず、会場のキャパシティが少なく、また運営も十分な準備ができていなかったことから相当な不安を覚えたこともあったが、観客とアーティストの一体感は日本のコンサートとは比較にならないほど熱く盛り上がり、以降今年に至るまで毎年複数の福岡で活動するミュージシャンが参加し、バンコクにおいて福岡の音楽シーンを伝える大きな役割を果たし続けている。

海外でオーディエンスに一定の評価を、メジャーレーベルの力を借りずにもらうにはいくつかの条件があるが、歌詞が理解してもらえない以上、最低でも以下の3つのポイントは必要であろう。音楽的に共通したマインドを持ってもらうこと、見ていて楽しいパフォーマンスを行うこと、一生懸命にプレイすること…。過去に海外のイベントに派遣したミュージシャンはこれらの条件を満たした上に、プラスアルファを感じる人たちであった。おかげで、初めて出演するイベントでも、おおむね、良好な反応をもらえたのではないかと思っている。

アジア各都市で行われる音楽イベントの情報は、なかなかここ福岡にもたらされる機会がなかったのだが、実際にイベントに出演し、違う言葉を話す人たちが自分の音楽を聴いてくれ、共感してくれる機会に恵まれたミュージシャンは、今度は福岡に実体験の情報をもたらしてくれることとなる。かつて東京で活躍した先輩ミュージシャンを見て、東京を目指してがんばったように、海外で活動する先輩ミュージシャンを見て聞いて、そこを目指してがんばる次世代のミュージシャンがここ福岡から多く名乗り出てくれることを期待しているとともに、いちラジオマンとしても、とても楽しみにしている。

写真1：The Travellersはバンコクでも人気で多くの観客がステージ前に詰め掛けた

写真2：2007北京ポップフェスティバル Doc Holiday & Apache Train

写真3：彼らのステージは北京の多くの若者が注目した

写真4：2005年、屋外で行われたファットフェスティバル、ステージ前には多くの若者がつめかけた

写真5：2007ファットフェスティバル出演のThe Travellers

写真6：2007年ファットフェスティバル出演、福岡のアフリカンバンド「Folikan」
（写真提供：アジア・ユース・カルチャー・センター）

さかた たかし
佐賀県佐賀市出身。明治学院大学法学部法律学科卒業。エフエム佐賀開局時より放送業務部勤務、その後九州国際エフエム（LoveFM）開局に携わり、営業制作部長として営業と編成の統括業務に従事しながら2005年より福岡県のアジア若者文化交流事業において、アジア・ユース・カルチャー・センター長を兼務、2006年より九州国際エフエム取締役営業制作部長。

アジア太平洋都市サミット

■アジア太平洋都市サミット会員都市

●海外(19都市)
オークランド市(ニュージーランド)、バンコク市(タイ王国)②、ブリスベン市(オーストラリア連邦)③、釜山広域市(大韓民国)、済州特別自治道(大韓民国)、大連市(中華人民共和国)⑥、広州市(中華人民共和国)、ホーチミン市(ベトナム社会主義共和国)②、香港特別行政区政府(中華人民共和国)、ホノルル市(アメリカ合衆国)、イポー市(マレーシア)、ジャカルタ特別市(インドネシア共和国)③、クアラルンプール市(マレーシア)、マニラ市(フィリピン共和国)、浦項市(大韓民国)、上海市(中華人民共和国)、シンガポール共和国(シンガポール共和国)、ウルムチ市(中華人民共和国)①、ウラジオストク市(ロシア連邦)

●国内(9都市)
鹿児島市、北九州市④、熊本市、宮崎市、長崎市、那覇市、大分市、佐賀市、福岡市④

注:○数字はfU+掲載号数です。

ダイナミック大連と第8回アジア太平洋都市サミット

(財)福岡アジア都市研究所 交流推進係長 アジア太平洋都市サミット事務局 山本 公平

プロローグ

今回の大連入りは、いかにも中国的=急成長的でダイナミックなお出迎えで始まった。当初予約したホテルの受付は、ホームページでは6階となっており、エレベータで直行したのだが、ドアが開き、目の前に広がるのは土煙の工事現場。え……。大陸では小さな事にはこだわらないのが肝要だ。昔「マルコヴィッチの穴」という傑作な映画で、本来あり得ない7と1/2階の、天井高が半分のオフィスにエレベータが止まるシーンがあったが、そんな非日常的体験でちょっと得した気分になれた。駅前を歩いていると、突然駅側からもうもうと土煙が立ち昇り、人々があたふたとこちらに逃げてくる。たちまち周辺の視界が遮られ、騒然とした空気に包まれた。スペクタクルも満載だ。

上野駅とほぼ同じ設計の大連駅の側から土煙が立ち上った

大連市概要

大連市は面積が福岡県の約3倍、人口約600万人、中心市街地を見ると明らかに福岡よりも大都会だ。しかし、人口密度を考えれば、一歩街を離れると、のどかな風景が広がっているのだろう。また、国連から「居住環境賞」「グローバル500環境賞」を受けるなど、環境面での評価も高く、

重厚な欧風建築に歴史を感じる中山広場

私の数少ない中国経験の中でも、緑にあふれた最も美しい都市だと思う。中国では中堅どころの市ではあるが、規模・権限から言っても日本の「県」以上のものがある。上海の様な省レベルの直轄市でもなければ、瀋陽の様な省都(県庁所在地)でもないが、経済・財政・法政面で省級の自治権がある副省級市である。夏のダボス会議の定期開催地となるなど、国際・外交政策についても日本の政令指定都市なみか、それ以上のものを感じる。

大連の歴史

清朝時代は小集落にすぎなかったこの地の発展は1893年ロシアの租借権獲得に始まる。彼らが目をつけたのは、軍港としての地の利に恵まれた旅順であった。しかしアジア制覇を目論むロシアの野望は、天津、上海、香港、シンガポールに対抗できるような商都の建設であった。このため、旅順に程近い小集落の寒村が商港と商業都市開発の場として選ばれた。ロシアはここを「遠方」を意味する「ダーリニー」と名付けた。この都市はロシアの満鉄とも言える「東清鉄道」に託された。欧亜間鉄道の終着点は東シナ海、太平洋への出発点でもあり野望が込められた土地でもあった。ロシアが都市計画を立てたダーリニーだが、街路は19世紀のパリをモデルにしており、ドイツ人技師が建築設計を担当したため、民間のものを除くと意外にロシア建築は少ない。ちなみにこの時代のドイツ様式建築、東清鉄道汽船会社社屋のレプリカを友好都市の北九州市に見ることが出来る。ロシアは、都市設計と一部の行政市街・港湾施設の建設を推進し、ダーリニーも人口4万人ほどの都市となっていたが、1904年日露戦争勃発。1905年には、旅順でロシア軍が降伏し、ダーリニーは日本軍により大連と改名された(発音が似ているが、実際には現地の通称をTalien-wanとして記載した1860年の英国の海図が嚆矢であり、ロシア語との関連は無いようだ)。その翌年東京に南満州鉄道株式会社が設立される。ご存じのとおり植民地経営のための国策会社、日本版東インド会社である。清国に最長の鉄道を敷設したのはイギリスだそうだが、鉄道による植民地支配は当時の常道だ。満鉄の場合、線路沿い及び駅周辺は付属地=治外法権地域とされ、実質的には福岡市程の面積の領土を得た。鉄道以外にも、エネルギー供給、都市交通、港湾建設、鉱工業から病院、消防、図書館、遊園地、日本のプロ野球の逸材を輩出した大連満州倶楽部の運営など幅広い事業を行う巨大コンツェルンだった。1907年、本社は大連に移転。日本の最高の頭脳が集結、関東都監督府と共に、ロシアの計画を基に都市建設を推進した。この調査部は当時日本最大のシンクタンクであり、満州での都市計画は、戦後日本の復興計画にも大きな役割を果たした。大連や長春などの都市は、建設当時、日本からも先進的な「東洋一の文化都市」と見られており、その血脈を受け継ぐ現在の大連の街並みが洗練されているのもうなずける、等と言うと傲慢に過ぎるだろうか。なお1915年特別市制施行時の人口の45%は日本人だった。

大連市役所は元関東州庁舎

アジア太平洋都市サミット開幕前夜

このサミットは、アジア太平洋の28都市を会員とする市長会議で、1994年福岡市の提唱で始まった。今回のサミット開催は、前回のウルムチ市に引き続き中国、しかも国際都市として名高く日本人にもなじみ深い大連市であり、私も、ある意味かなり安心(油断?)していた。しかし、国際都市大連をなめてはいけない。中国都市の体制的な特徴に加え、辣腕政治家として常に戦略的に政策を推進する、市長のリーダーシップによる所も大きいかもしれないが、とにかく、計画がダイナミックに変更される。十数ヶ国から数百人のVIPも含めた参加者が集まる国際会議なのだが、1ヶ月前まで開催日程が二転三転、会議のスケジュールなどは、前日まで不確定要素が多く、当日までドキドキ・ワクワクの連続だった。特に今回は、チベット問題やオリンピック開催、四川大地震等、大きな問題が重なり、予算や政府の意向など様々な予想外の対応を迫られたり、先に挙げたダボス会議の誘致といった最重点事業も担いながら、最終的にはサミットの成功裡開催を実現した。これも一重に、何事にも臨機応変にダイナミックな対応が出来る、大連市ならではの離れ業だったのかもしれない。

盛会のサミットと大連の狙い

結局大連市の並々ならぬ努力の甲斐もあり、約40都市・団体から200人余りの参加者が集い、第8回サミットは大盛会となった。また分科会では16都市から最

全体会議

新の施策事例が発表されたが、中国や韓国等のレベルはかなり高く、日本の都市であってもかつてのような優位性が無くなっていると感じた。そして、日本がアジアの最先端を走り、夢も経済力もあった時代に構想された、協力・貢献を主軸と

釜山広域市の分科会発表資料:公園のデザインコンセプト

するような会議の意義について改めて考えさせられた。我々事務局は、サミットでいかに具体的な貢献・成果を生み出すかに汲々としていた。しかし、開催都市の

盛大なおもてなしは中国流

参加都市代表者

狙いはまちまちであり、どちらかというと事務局の意向と違った方向を向いていることが多い。特に拡大・成長途上の都市の場合、会の成功は、より多くの有名都市・著名人・VIPの参加で注目を集め、主催都市や市長のプロモーションをすることや、多くの参加者と個別会談を行い、交流を深め、投資や企業誘致などの経済効果を推進することである。また、実態としても多様な都市が集う会議の場合、そこに多都市間での具体的な成果を見いだすのは容易なことではない。

これからのサミットと都市間ネットワーク

今後当面のサミットは、市長会議では、都市ネットワークの拡大と共に、最新の都市政策情報の交換、参加都市の主に2都市間での情報交換など交渉機会の充実、主催都市のプロモーション、事務局都市としての福岡市の役割分担と知名度の向上等を志向することが現実的のようだ。また、現在我々は、具体的な都市間連携・協力の推進方策を模索しており、次の頁で紹介する市民を交えた実務者レベルでの研修・ワークショップ形式の共同事業は主要な取り組みの一つとなっている。

アジア太平洋都市サミット共同研究事業

「まちづくり市民交流ワークショップ・Charm Hunting Workshop3」 “Creating New Value”

「世界でもっとも“お買物を楽しめる都市”に選ばれた福岡市からのご提案」 Proposal by The Best Retail City “FUKUOKA”

～福岡市・大連市・バンコク都による「まち歩き・魅力探索ワークショップ」報告～

（財）福岡アジア都市研究所 研究主査　山下 永子

第8回サミットの併催事業として、大連にて「まちづくり市民の交流・まちの魅力づくり」をテーマに「まち歩き・魅力探索ワークショップ」を行ってきた。2007年8月天神・大名、2007年12月バンコクに引き続く第3回目の今回は、大連・福岡に、バンコクからのゲストも加わり、より「大ごと」だけれども「充実した」プログラムとなった。

参加していただいた市民の方々

We Love天神協議会2名、Green Bird福岡1名、ビジターズ・インダストリー都市塾3期生2名、博多まちづくり協議会1名。30代を中心としたバリバリの「まちづくり人材」が、それぞれテーマを持って、まち歩き・プレゼンに挑んだ。

市長を囲んで（ニコニコ）

1.5日間の集中プログラムはこんな内容

1.福岡市からの事例発表
- ·福岡市の概要
- ·天神における魅力づくりの取組
- ·Green Bird福岡の活動とまちづくり
- ·博多における魅力ある駅づくり·にぎわいのあるまちづくり
- ·バンコクで行ったワークショップ成果の応用及び共働まちづくりについて

2.大連市の中心商業地区の現状と課題発表
- ·大連市天津街における魅力づくり

Walking Tour.天津街チャーム・ハンティング・ツアー
- ·天津街担当者と街歩き「魅力」の写真を撮る

WorkShop大連の魅力ワークショップ

「Creating New Value」

■魅力プレゼンテーション:写真説明·発表
- ·福岡からから見た天津街（チーム福岡7名）
- ·バンコクから見た天津街（バンコクゲスト2名）

■フォトマッピングセッション:写真配置比較

大連市天津街に対する「魅力にまつわる意見・提言」

「魅力プレゼンテーション」では、福岡の7名、バンコクの2名が写真を示しながら次のような意見を述べた。

【ポジティブ意見】「繁華街の歩行者天国に、花壇やゆっくり休めるベンチが多い」「歩道沿いに植栽があり、緑が多い」「中山広場など人々が楽しめる公園が街中にあるのがとてもよい」「古い建造物が良い状態で維持されている」「広告の方法が日本と異なり興味深い」「歩行者天国には雑多な屋台が沢山出ており食べ歩きが楽しい」「蠍や蜘蛛の串焼きなど刺激的なものがあって楽しい」「雑多の中に賑わいがあり歩いてわくわくした」。

通りの植栽（まんまる）

ベンチの老人（のんびり）

ウニ塗焼鳥（そそられる）

蠍に蜘蛛に海星（ひく）

満州麺料理（てがでそう）

歩道占拠車（くるまさま）

【ネガティブ意見】「横断歩道がほとんどなく横断時に歩行者が危険を感じる」「歩道に車が駐車してある」「車が多い車道脇の歩道が狭く通行時に危険を感じる」「休日なのに観光案内所が閉まっている」「中国語のみの標識が多く、観光客向けの英語の表示も必要だ」「警備員がいるのは良いが表情が硬すぎる」

福岡市、バンコク都からの意見や感想に対し、歩車分離式信号や歩道、横断歩道の整備、観光案内所のサービス充実、外国人観光客向けの英語標識の設置など、大連市側は指摘された点に関して早急に改善を検討し、今後も、福岡市、バンコク都を視察するなど交流を続けたいと応じた。

気づかされた時間感覚・価値観の差

「フォトマッピングセッション」では、都市別3グループに分かれ、3セットの写真を、縦軸-横軸（魅力的-非魅力的／伝統的-現代的）にそれぞれ配置し、比較しあったところ、色んな気づきを経験することができた。

例えば、バンコクチームが「伝統的」とした光景を、大連チームは「現代的」に配置した⇒【時間感覚の差異】。福岡チームは「現代的」「魅力的」なエリアに人が沢山写った写真を数多く配した。一方、大連チームの「現代的」「魅力的」なエリアには、建物やストリートファニチャーやサイン等の写真が多く見られた。⇒【福岡はコミュニケーションの場·空間（ソフト面）重視、大連は整然とした空間（ハード）重視という差異】。

こうした歴史的な物への時間感覚や価値観の違いへの気づきは、来訪者に楽しんでもらうためのプログラムづくり、地図やパンフレットづくり等へのヒントを与えてくれた。また、そういったものを今後協力し合いながら共同開発したりすることの可能性も見出すことができた。

これらの共同作業を行ったことにより、相互比較のアプローチを、都市の魅力づくり施策に取り入れていくことの有用性を感じさせるワークショップとなった。

マッピング中（作法にも差）

総括として:「狙い」と「目標」の視点からの振り返り

URC·アジア太平洋都市サミット事務局は、国際都市間協力の1分野として「市民のまちづくり協力·交流」スキームの構築を進めていきたいと考えている。その考えの背景を振り返りながら、このワークショップの「意義」、いや戦略的「狙い」「目標」について、ちょっと私的観点から語らせていただきたいと思う。

これまで、都市間協力というと、「北→南」「先進→開発途上」というベクトルで「援助や貢献を与えるもの」というイメージが強く、実際、技術協力や技術者派遣といった専門分野の協力が主に行われてきた。また、都市間協力の多くが、一部を除き、行政機関どうし、行政職員間の活動において実施され、広く市民を巻き込んだ形での拡がりは見られてこなかった。国際社会の環境が大きく変わり、協力目的の多様化や（欧米などは協力活動は将来のビジネスのための第一歩と捉えている）、世界において「都市政府が担う政策領域」に変化がみられるなか（都市政府が外に出て行って自都市の良さを積極的にアピールすることが普通になってきている）、協力活動もWIN-WINな結果をもたらすように、つまり自市にメリットのある形で推進していくことが当たり前になってきている。

では、WIN-WINでメリットがあるような協力分野とは何か。考えて閃いたのが、福岡市が世界の中でもかなり進んでいる分野「都心部エリアにおける官民協働によるシティマネジメント」を紹介すること。先進事例と言い切って「これからの都心づくり」の参考にしていただくことである。傲慢ぽい言い方かもしれないが、モノクルでベスト·リテール·シティのお墨付きを頂いた福岡市の商業集積地CBDエリアは、胸を張って「良いとこでしょ」って言えるし、「なぜなら、官と民、しかも働く若い人たちが一緒に協力し合って魅力づくりに日々励んでいるからよ」って言うと、「流石、見習いたいものだ」「紹介していただいてためになった」そう思っていただけると思うのだ。

実際、これまでアジアでは、官主導、あるいは大財閥主導によってまちづくり、都心の魅力づくりが進められて来たのだけれども、「やはり市民の参画がないと、次のステップの成熟した都市には成れない、見なされない」ということに気づき始めている。だからこそ、東南アジアのトップランナー·バンコクが一等最初にこの企画に飛びついた。

福岡市は、市民との協働によるまちづくりを進めるために、様々な分野や手法で人材育成につながるプログラムを展開し、育った人材とともに、まちづくりを進めてきた実績に満ち溢れている。今回大連に行っていただいた市民の方々が行ったプレゼンテーションは、本当に素晴らしかった。大連で同行取材された西日本新聞の記者も「専門的で的確で驚いた！レベルが高い！」と舌を巻くほどの高品質だった。

「市民一人ひとりが、自分たちが生活するまちを誇りに思い、その良さを積極的に外に伝えていくこと」は、最も効果的なシティプロモーションの1つだと思う。海外からの集客促進を目指す福岡市の都心部天神·博多、九州のまちづくり人材が、他都市を訪問し、お互いに情報を交換し、学びあい、相互に活発に行き来することが、まちや都市を活気あるものとし、より魅力的なものにしていくのだとも思うし、各人を成長させるのだと思う。

さて拡散しすぎてしまった。要は、本ワークショップの狙いは、「官民協働で進んだまちづくりを行い、魅力づくりに成功している福岡市としてブランディングすること」にあり、目標として「本事業の継続的実施を通じて一人でも多くの市民を巻き込んで、将来的には市民たちが自発的に取り組めるようなプログラムに仕立てていくこと」を掲げていた、ということを企画者として最後に述べておきたかったのである。

参加者集合写真（四ヶ国語リレー通訳もやったのだ）

そして次は九州で

次は、大連·バンコクから招いて、福岡、熊本、鹿児島三都市でやってみたいと考えている。もちろん、新幹線全線開通後のことを睨んでである。だから釜山にも声をかけてみたいとも思っている。アジアからのツーリストが、新幹線に乗って九州を回りたくなるような「まちの魅力·駅前の顔づくり」は、今からやっておくべき大切なことだと思う。

天神·博多·熊本·鹿児島の駅を降りた瞬間、感じる空気や目に飛び込んでいる風景が、まちの個性を一瞬にして表現するものであれば、「やっぱり、熊本は福岡や鹿児島とは違う、来てよかった」って思っていただけるはずだ。九州新幹線全線開通が、九州内の都市間競争をあおるものではなく、都市の個性を際立たせる契機になってくれればと考えている。特に、海外からの集客の促進剤になってくれればこの上ない。

そういった意味においても、海外ツーリストの比較の目で、九州の都市をじっくり評価してもらえる機会をつくっていけたらと思う。次のワークショップ開催に向け、今回の経験をきちんと整理·分析し、より良いプログラムにしていきたいと考えている次第である。

中国街角スケッチ

大連「海創週」

（財）福岡アジア都市研究所 主任研究員　唐 寅

写真1：大連博覧広場

写真2：開幕式

写真3：外資企業の展示ブース

写真4：創業環境展示

写真5：投資商談

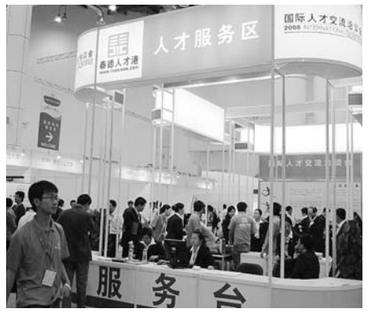


写真6：人材紹介ブース

9月23日から26日まで、「中国海外学子遼寧（大連）創業週」（CHINAOCS2008、略称「海創週」）が大連世界博覧広場で開かれ（写真1）、日本やアメリカなど海外14ヶ国から680名に上る中国人留学生と、IBMやヤフーなど内外企業200社近くが参加した（写真2・3）。これは、中国海外留学人材の就職斡旋と創業投資促進を目的に2000年から始まったイベントであり、国家科学技術部や教育部といった中央省庁と遼寧省、大連市が主催者をつとめ、経費は全額遼寧省と大連市が負担している。

1978年以降、中国から海外留学に出た人は110万人に上り、そのうちの30万人はすでに帰国している。先進国で学び、国際感覚を持ちあわせた「海帰派」（海外帰国派）の可能性に注目が集まり、中国経済の発展を担う大きな原動力として期待されてきた。最近では、海外留学人材の帰国を促すだけでなく、彼らが海外で学んだ先進技術を持ち帰り、中国国内での創業促進を支援する方向へと政策がシフトしている。会社設立手続きのサポートや創業資金の調達支援、優遇税制の実施、住居購入と子弟教育の優遇など、優秀な海外留学人材を地元に呼び込むための特色ある勧誘策を各地が競い合っている。よく知られているのは、1994年以降全国各地に設立されている「特区」のような「留学人員創業園」（インキュベータ施設）であり、創業支援策を集中的に導入していることが特色といわれている。全国の110ケ所以上もある「創業園」の中に、留学人材が設立した会社は既に10,000社を超えている。今回の大連「海創週」会場にも、北京や上海など全国から25の「創業園」が出展し、創業環境のすばらしさを熱心にPRしていた（写真4）。

「海創週」期間中に、創業経験や業界動向を紹介する4つのフォーラム（創業リーダー、国際人材、ベンチャー投資、デザイン）、留学人材と国内企業のマッチングをはかる2つの商談会（事業投資計画ー写真5、人材紹介ー写真6）、海外人材活躍のマクロ環境を紹介する2つの展示会（全国留学人員創業環境、遼寧省重点産業）が開催され、具体的な事業投資計画の提案や、人材の紹介斡旋、そして創業資金の調達ルートなどについて、参加者は各々のブース前に集まって熱心に意見を交換していた。

このような大規模な「海創週」は既に8回も開催され、海外から延べ7,000人以上の留学人材が参加した。うち5,000人以上が具体的な事業投資計画を持って、1,000社あまりの企業や学校、科学研究機関と交流を行ってきたという。そして現在既に500件あまりの計画が事業化され、総生産高も200億元を超えている。

毎年継続的に開催してきた「海創週」は、海外人材誘致に対する大連の姿勢をアピールする代表行事であり、その積み重ねが大連という都市を格上げさせ、持続的発展を支えていくと行政当局者が強調している。

INFORMATION

［インフォメーション］

EVENT イベント

●（財）福岡アジア都市研究所シンポジウム
（財）総合研究開発機構（NIRA）地方シンクタンクワークショップ

「ゲーム産業の拠点を目指す福岡の挑戦」

日　　時：2009年1月23日(金)　13:30～16:10 ※開場13:00
場　　所：ソラリア西鉄ホテル8階花の間（福岡市中央区天神2-2-43）
【第1部】基調講演：「世界と日本のゲーム産業と文化」
　　馬場　章（東京大学大学院情報学環教授・日本デジタルゲーム学会会長）
　　基調報告：「福岡ゲーム産業振興機構の取り組み」
　　土井 裕幹（福岡市経済振興局産業拠点推進課長 ）
【第2部】パネルディスカッション：「福岡市のゲーム産業の展望について（仮）」
　コーディネーター　前田　真（九州大学知的財産本部准教授）
　パネリスト　　馬場　章（東京大学大学院情報学環教授）
　　土井 裕幹（福岡市経済振興局産業拠点推進課長）
　　宮迫　靖（システムソフト・アルファー株式会社社長）
　　中道 忠和（大阪市立大学大学院創造都市研究科）
主　　催：(財)福岡アジア都市研究所、(財)総合研究開発機構（NIRA）
共　　催：福岡市
後　　援：地方シンクタンク協議会、日本デジタルゲーム学会、福岡ゲーム産業振興機構
定　　員：200名　　※参加無料
申込締切：2009年1月20日（火）
申込方法：「ゲームシンポジウム希望」と明記し、郵便番号、住所、氏名（よみがな）、電話番号、メールアドレスをご記入のうえ、電話、FAX、E-mail（event@urc.or.jp）で福岡アジア都市研究所までお送り下さい。（ホームページからの申込も可能です）

■賛助会員制度

年会費（法人一口：10,000円、個人一口：5,000円）をお支払いいただくと、さまざまな特典が受けられる賛助会員制度があります。詳しくは、（財）福岡アジア都市研究所までお尋ねください。
TEL：092-733-5686 FAX：092-733-5680 E-mail: info@urc.or.jp

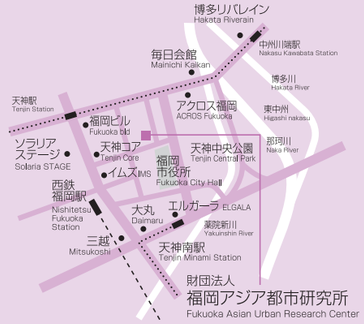
●特典 ――― 1. 研究所主催のセミナー等の開催情報をお知らせします。
（都市政策資料室ミニセミナーは賛助会員・市職員限定で開催しています。）
2. 都市情報誌fU＋を毎号1部無料でお届けします。
3. 研究紀要を毎号1部無料でお届けします。
4. 中国動向・韓国動向を毎号1部無料でお届けします。
5. ニューズレター「都市研」を毎号、eメールまたは郵送により無料でお届けします。

■都市政策資料室

（財）福岡アジア都市研究所の都市政策資料室では、アジア地域を含む都市政策関係図書、各種調査・研究の成果報告書、行政資料などを幅広く収集・公開しております。また、アジア開発銀行の寄託図書室の指定を受けております。どなたでもご利用いただけます。皆様のご利用をお待ちしております。

開室：月～金10:00～17:00
（土曜日・日曜日・祝日・年末年始・毎月最終業務日・資料整理期間（不定期）は休み）

資料検索：研究所のホームページから資料室の図書・資料が検索できます。



■バックナンバーのお知らせ

第1号
（2006年12月25日発行）
特集 博多駅
―現在（いま）・過去・未来―

第3号
（2007年6月22日発行）
特集 地域の商店街
―賑わいのある商店街をめざして―

第5号
（2008年7月31日発行）
特集 URC20周年

第2号
（2007年3月30日発行）
特集 まち歩き
―まちの魅力再発見―

第4号
（2007年12月14日発行）
特集 国際交流・貢献
―国際化の取り組み―

※当研究所のホームページからご覧いただけます。

●ニューズレター「都市研」創刊！

研究所の活動をお知らせするニューズレター「都市研」（編集・発行/都市政策資料室）を11月から発行しています。「URC資料室だより」は、連載の一つとなりました。下記URLより「都市研」（バックナンバー含む）をお読みいただけます。ご利用ください！
http://www.urc.or.jp/syuppan/news/index.html

●編集後記

特集では、福岡のまちで毎年秋に行われているイベントを数点紹介しました。イベントの背景や人についても掘り下げた記事を掲載しています。快く原稿や写真をご提供くださいました関係者の方々、外国や他都市の事例をご紹介くださった橋爪先生に厚くお礼申し上げます。皆さまはイベントに参加されましたか？私は読書の秋、BOOKUOKAに行ってみました。まちを賑やかにするヒントに今号をご活用ください！（瀧山）

●次号予告

第7号　2009年6月発行予定

特集「低炭素社会をめざして―未来への提言―」（仮題）

地球温暖化対策の必要性が叫ばれて久しい昨今、日本政府は2007年5月の「クールアース50」で世界全体の温室効果ガスの排出量を2050年までに現状から半減するという長期目標を掲げ、「低炭素社会づくり」を進めようとしています。それでは、どのように取り組んだらよいのでしょうか。福岡市の現状や他都市の事例、将来へ向けた提言を通して考えます。

都市情報誌fU＋（エフ・ユー プラス）第6号
2008年12月24日発行
■発行所
財団法人福岡アジア都市研究所
〒810-0001 福岡市中央区天神1-10-1
福岡市役所北別館6F
TEL: 092-733-5686
FAX: 092-733-5680
E-mail:info@urc.or.jp
URL:http://www.urc.or.jp
■編 集 責 任 者：桑田哲志
■編 集 ス タ ッ フ：瀧山直子　弥富 愛
■デザイン・印刷：秀巧社印刷株式会社